

白露日和

夜咲ひつき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

白露型や吹雪を筆頭とした艦娘たちとまつたりするお話。シリアルはありません、多
分。

目

次

朝ごはん	お散歩っぽい！	春雨が食べたい	村雨さんは構われたい	お昼寝わんこ	ぶつきー、キレる	春雨イド	病める白露	パンツパンツです！	ブランデー春雨	からかい上手（笑）の鈴谷さん	—
58	54	48	42	37	32	26	22	17	13	9	1

お花見	時雨桜	大天使フルタカエル	撫でポイヌ	白露日和	白露日和2	白露日和3	ミツドナイト春雨	二年目の誕生会	ブクマ百人記念 百人目の艦隊員	星に願いを	夏のひとつとき
117	112	100	96	90	87	83	79	75	70	64	

雨と宿りて

第六駆逐隊なのです！

とりつくおあたりーと！

好感度メーター前編

135 131 125 121

朝ごはん

鎮守府の一角、個人で使うために設けられたキツチンで一人の少女が鼻歌交じりで包丁を振っていた。

「ふんふくん♪」

濡れ羽色の三つ編みを上機嫌に揺らす彼女の後ろでは三人の少女が座っている。

「時雨～まだ～？」

「もうすぐできるから待つてよ、姉さん」

四人の長女、白露はテーブルに顔を突つ伏しながら足をパタパタと動かしていた。

「やだ～お腹空いた～！」

「長女なんだからしつかりしてよ……」

「まつたくもう、これだと村雨の方がお姉さんらしいよ」

三女、村雨はそんな長女を呆れたように笑った。その横で四女の夕立はきよろきよろと辺りを見回している。

「提督さんは？」

「まだ起きてないみたいだね。夕立、悪いけど起こしてきてくれない？」

「行つてくるっぽい！」

立ち上がつた夕立は勢いよく部屋の外に駆けてゆく。その後ろ姿を白露は眩しいものを見るかのように見送つた。

「夕立は元気だねえ……」

「姉さんもいつもあんな感じじやん」

「うそおつ!?」

「ほんと」

次女、時雨が白露に冷ややかな目を向けるのを、村雨は楽しそうに眺めていた。

× × ×

「提督さまん！」

霧がかかつたような覚めない意識の中、俺を呼ぶ声が聞こえる。遠いような、近いような場所から届く心地のいい声。

「もう朝つぽい！」

独特の口癖はもう違和感を感じない程耳に馴染み、それが聞こえることに安堵さえしている。

「もう」

だからか、浮上しかけた意識は再び深海へとしづ「いい加減起きるっぽい!!」「ぐえつ

！」

モーニングコールはつぶれたヒキガエルのような自分の声。しかも夕立が飛び乗つてきたせいでめつさお腹痛い。

「……おはよう、夕立」

「おはようございますっぽい！」

どうせならその可愛らしい声でもうちよつと頑張つて起こしてほしかつた……。

紅い目をこちらに向けて元気よく挨拶をするのは白露型四番艦の夕立。それなりに人数のいるこの鎮守府の中でも最古参の一人だ。

「それと飛び乗るのはやめてくれな」

「ごめんなさいっぽい……」

しゅんと犬耳のような髪を垂れさせる夕立だが、わしやわしやと頭を撫でると気持ちよさそうに目を伏せた。

「わかればいいさ」

俺は夕立の頭から手を離すと、一度捲った布団をまた被つた。

「じゃあおやすみ」

「ここまできて二度寝!? 往生際が悪いっぽい！」

「春眠暁を覚えずつてな、ほら、夕立もどうだ?」

俺は一人分のスペースを開けて夕立に悪魔の囁きを投げかけた。

「……」

「……」

「……一緒に寝るつぽい！」

「素直でよろしい」

長い葛藤の末、彼女の中の天使夕立は負けてしまったようだ。
入ってきた夕立とりの字を作つて、再び眠りについた。

× × ×

「ごめんなさいっ！遅れましたかっ！？」

夕立が去つたあと、桃色の髪を慌ただしく跳ねさせながら一人の少女が時雨たちの前に現れた。

五女、春雨が謝るのを時雨は笑つて許し、部屋に招き入れた。

「僕たちは任務があるから早く起きただけ。春雨は今日おやすみでしょ」

「そうそう、もつと寝てもいいのよ？」

「ううん、それだと白露姉さんみたいになっちゃうから」

「こらあ！どういう意味だ！そんなことを言うのはこの口か!?」

「やめふえねえふあん」

白露が春雨の頬をムニムニと伸ばしていると、時雨が時計を見てため息を吐いた。

「夕立遅いね」

「ほうひえはふうはひほへえふあんは?」

「……姉さん、離してあげて」

「ごめんごめんっ」

「あう」

白露が手を離すと、春雨は小さく悲鳴を上げて頬をさすつた。

「それで、夕立姉さんはどこに?」

「ああ、提督の部屋だよ。ちょうどいいや、春雨、様子を見てきてもらつてもいい? 姉さんか村雨でもいいけど。朝ごはんの準備変わってくれるなら僕が行くし」

「私が行きます!」

「そう? ジヤあお願ひ」

× × ×

「……司令官?」

「夕立姉さんがいないけど……。とりあえず起こしちゃいましょう!」

「司令官、朝ですよ」

可愛らしい声と、優しく揺らす手によつて、最高の目覚めで新しい朝を迎えた。そう

そう、これだよこれ。ヒキガエル？知らない子ですね。

「ん、おはよう春雨」

「はい！おはようございます司令官！」

眩しい笑顔と共に挨拶をしてくれる彼女は白露型五番館の春雨。夕立とは真逆で先日迎えたばかりの新人だ。とは言つてももう一ヶ月くらいは経つてゐるが。

「それで司令官、夕立姉さんを知りませんか？ここにいるつて聞いたんですけど……」

「ああ、夕立なら——」

そのとき、ちょうど俺の隣で夕立が体を起こして伸びをした。

「ぱい〜〜」

「ここだ」

「夕立姉さん!? 司令官の布団の中でナニを……はつ!?」

そんな夕立の姿を見た瞬間、ついさっきまで表情豊かだった春雨は啞然として動かなくなってしまった。何か勘違いしてない?

「し、」

「し？」

「失礼しましたああ〜〜!!」

「春雨ええ!?」

脱兎のごとく部屋から出ていく春雨に手を伸ばすが、既に彼女は遙か遠方に行つてしまっていた。

「起きた？」
はあ、とため息を一つ吐いて、俺は目をざしざしとこすつている夕立に視線をやつた。

「起きるか」
「ぱいっ！」

×

「遅いよ提督」
「悪い悪い」

彼女たちの下に行くと、真っ先に春雨に怒られてしまった。それから俺の後ろに隠れながら部屋に入った夕立も、抵抗むなしく春雨に叱られた。

「夕立も、起こしてきてって言つたのに」

「気付いたら一緒に寝てた。摩訶不思議っぽい！」
「もう……」

口ではそう言う春雨も、目元は優しく笑つてゐる。その隣では春雨が小さく『……そ
ういうことだつたんですね』と呟いて、頬を微かに赤く染めていた。

村雨はニコニコと皆を見つめ、白露は威勢よく立ち上がりつてグラスを手に取つた。
「それじゃあ一人も来たことだし！」

8 朝ごはん

「「「「「　いただきます！」」」」

お散歩つぽい！

ある日の昼下がり、執務が一段落ついてグツと背中を伸ばすと、窓の外にのどかな青空が見えた。最近運動なんてほとんどしていなかつたし偶には散歩も悪くはないかもしない。

思い立つたが吉日と言わんばかりに、俺は外套を羽織り執務室を後にした。

もう冬は過ぎたとはいえばまだ少しばかり肌寒い。ちょうど一迅の春風が目の前から歩いてきた彼女たちの首筋を撫で、二人は首を縮こまらせて身震いした。

「三月とはいえそんな薄着してたら寒いぞ」

「あ、こんにちは提督。いい天気だね」

「提督さん！ こんにちはつぽい！」

落ち着いた雰囲気の時雨と、元気いっぱいの夕立。姉妹でありながら白露型は皆個性豊かで、見ていて本当に飽きない。……いや、地味なのがダメなわけじゃないけどな。ほら、吹雪とか可愛いし。

「二人はどうしたんだ？」

「ちょっと暇だつたから散歩。よかつたら提督もどう？」

目的を同じくする以上ここで断る理由もあるまい。一人で歩くよりも華があるしな。

「じゃあお言葉に甘えようかな」

「やつたー！ いつしょにお散歩するっぽい！」

「誘つといて言うのもなんだけどよかつたの？ 忙しいんじゃない？」

飛び跳ねんばかりに喜ぶ夕立の隣で、時雨が不安そうに首を傾げた。

「根を詰めても書類は減らないからな」

「それもそうだね」

「どうかお前たちこそよかつたのか？」

「こんなおっさんと散歩したって面白味もないだろうに。」

「はあ……」

時雨はため息とともに首をすくめた。今度のはきっと寒さのせいではない。

「提督、そういうところは変わつてないよね」

「どんなところかは知らんが、むしろ変わつたところあるか？」

「彼女たちと初めて会つてから約一年。長いようだがとても短く感じたこの時間の中

で周りは多く変わつたにしても、俺自身が何か変わつたようには思えなかつた。

「あるよ。階級だつて上がつたし、昔はそんな口調で話してくれたことなかつたじやな

いか」

「あ、そういうやうだつたな」

最初は距離感を保とうと、誰と話すにも敬語を使っていたんだつたか。

「それにこないだのあれだつて」

「あれ？」

「ほら、春雨が進水したとき。提督かつこつけちやつてさ。今まであんなことしなかつたのに。だめだ、思い出したらまた……ふふつ」

「おい、こら笑うな。あれは威厳を出そとだな」

久しぶりに迎えた新しい艦娘だつたので柄にもなくかつこつけようとした結果、時雨や吹雪に笑われたのはあまり思い出したくない記憶だ。

「ごめんごめん、でもやめといたほうがいいよ？春雨、ちょっと怖がつてたし

「うつ、それは悪いことしたな」

「大丈夫だよ。もうすっかり提督になついてるみたいだし。……ほんとに、すつごくね」

「何か言つたか？」

「何でもないよ。とにかく僕は、それに夕立も。ううん、この鎮守府の皆、提督と一緒に居られて嬉しいんだから」

艦娘を指揮する提督として、艦娘からそう言つてもらえるのは冥利に尽きるというものだ。

「……そ、うか」

何と答えればいいのかわからず、少し無愛想な返事になってしまった。そんな俺の内心を見透かしているかのように、時雨はやれやれと言わんばかりに軽く肩を揺らした。

「提督～！時雨～！早く来るっぽい！」

少し離れたところで夕立が俺たちに向けて大きく手を振っている。

「早く行こう。夕立に怒られちゃうよ」

「だな」

俺と時雨は顔を見合させて笑い、同時に足を踏み出した

春雨が食べたい

静かな執務室には、カリカリとペンが紙の上を走る音と秒針が刻む音だけがやけに大きく響く。気になつてしまふのは集中力が切れた証拠。一度ペンを置いて時計を見るともう正午を回つていた。

俺はまだ隣で書類と睨めっこをしている今日の秘書官、春雨の肩を叩いた。

「春雨、休憩にしよう。お腹もすいだろ」

「あ、はい！わかりました！司令官はお昼どうされますか？」

普段は自炊か誰かに頼むかなんだが、今日は鳳翔のところに顔を出そうか。『時々で良いので来てください』、なんて言われたしな。

「たまには食堂にでも行くか」

「えっと、ご一緒してもよろしいでしようか？」

「そうしてくれると嬉しいな」

「はい！」

春雨はパタパタとおさげ髪を揺らしながら部屋から出ようとする俺の横に並んだ。

そのままいくらか会話をしながら鎮守府の廊下を歩き、食堂に着くと扉の奥からは賑や

かな声が聞こえてくる。

何となく、この雑多な騒がしさが苦手なんだよな。別に嫌いなわけではないし、うちの娘達が楽しそうな姿を見れるのは嬉しい限りなんだけど。こればっかりは性と言ふほかない。

食堂に入るどちらほらと視線を浴びせられる。中でも鳳翔は、俺の姿を見ると嬉しそうに手を合わせてこちらに笑顔を向けてくれた。そんなものを見せられては声を掛けないわけにもいかないじやないか。

「邪魔するぞ鳳翔」

「お久しぶりです提督。やつと来ててくれたんですね」

「鳳翔の手作りが恋しくなつてな」

「そう言うならもつと来てくださいよ……」

「……善処はしよう」

ちよつとカツコつけたけど嘘は言つてない。実際鳳翔や間宮の美味しいご飯を食べられるここはうちの鎮守府でも大人気だ。特に量を食べて値段も安めということでお城や加賀からの評判がいいらしい。

俺が隅の方の席に座ると、その正面の席を春雨が引いた。

「いただきます」

そうして箸を進めてからしばらく経つて、春雨がふと尋ねてきた。

「司令官、今日の夕飯は何がいいですか？春雨、頑張つて作っちゃいますよ！」

うちでは俺の夕食は大抵その日の秘書艦が作ってくれる。主に担当してくれる白露型姉妹や吹雪はある程度料理ができるし、比叡と磯風は当番からは外れているので俺の胃が死ぬ心配はない。

中でも時雨、春雨、吹雪の三人は特に美味しい物を作ってくれるので時々非番の日に頼んだりもしている。

しかし食べたいものか……。そう聞かれるとなかなか思い浮かばないのだが、『なんでもいいは一番困ります！』とこないだ吹雪に言われてしまつたしな。

頭をひねりながらじーっと春雨を見つめていると、彼女は小さく首を傾げた。可愛い。

さらに見つめると頭の上に疑問符を浮かべながら少し困った顔になつた。とても可愛い

「春雨が食べたい」

「ふえっ!?」

春雨は顔を真っ赤に染めてあわあわと口を動かしている。やがて何かに気付いたのか、恥ずかしそうに顔を伏せた。その肩はわずかに震えている。

「いえ……、なんでもないでしゅ……です……」

囁んでさらに恥ずかしくなったのか、肩の揺れが大きくなつた。にやけそうになる口を必死に堪えていると、春雨はついに耐えられなくなつたのか食器を持って立ち上がつた。

「さ、先に戻りますううう！」

「春雨ええ!?」

た。

× × ×

「うん、やっぱり春雨の春雨は美味しいなあ」

「司令官にそう言つてもらえると嬉しいです♪」

ウルトラ可愛い。

村雨さんは構われたい

提督の朝は日が昇り切る前に始まる。

朝の支度を手早く済ませて執務室に入ると、薄暗い部屋の中に暁の光が仄かに差し込んでいる。灯りを付けて窓の外を見れば、水平線から朝日が顔を出し始めた。毎朝この時間は一人だとはいえ、秘書艦のいない執務室つてなんか静かだなあ……。

そしてもう少し下に目線を落とせば、まだ朝も早いというのに吹雪と古鷹が敷地内を走っていた。彼女たちは毎朝ああやつてランニングをしており、俺も何度か混ぜてもらつたことがある。レースはいよいよ佳境に入り、二人がわずかに速度を上げる。あくまでもランニングのためデッドヒートというわけではないが、それでもどこか相手より先にゴールしようという気概が見受けられた

そしてその背後から猛然と迫る影。

二人が目印としている木にたどり着くまさにその瞬間、その影は二人の間を疾風の如く駆け抜けて幹に触れた。

『いっちはーん！』

声は聞こえないけど絶対そう言つてる。何やつてんだ白露……。

吹雪と古鷹は初め、突然の乱入者に戸惑いはしたが、すぐに三人で和気藹藹と話し始めた。

さて、吹雪や古鷹も頑張つてたし、俺も頑張らないと。

椅子に座ると、とりあえず執務机に置いてある当番表に目をやつた
「今日の秘書艦は村雨か」

いつも世話になつてゐるしできるだけ楽させてあげたい。今のうちに少し執務を減らしておこう。

「……今日もやりますかあ」

× × ×

「はいはーい、おまたせーーー！〇七〇〇、村雨参上しました！」

「……」

ううん、どうにも資源に偏りがあるな。

弾薬とボーキは結構余つてるけど鋼材と燃料がかなり少ない。遠征の計画を一度見直すか。

「あの、提督？」

開発も艦載機か対潜の方を進めるべきだな。

「おーい、提督うーー？」

あとで明石に連絡と、金剛や赤城にもその旨を伝えて。

「そうですか、この村雨を放置ですか……」

つてこの三日間空母は出撃させていないのにやけにボーキが……。

「村雨そんな趣味ないから！構つて――！」

「うおつ!? 村雨いたのか!？」

「いたのか？じやなーい！私何回も呼んだのにい……」

「すまん、考え方してた」

村雨の負担を減らすためにやつていたというのに村雨を待たせるとは本末転倒だな
……。

「忙しいのは分かるけど、その、私も構つてよ……」

「悪かつたつて、ほら、かわりに今日の書類結構終わらせたから早めに上がらせてやれる
ぞ」

「えつ、これ全部終わつたやつなの?」

「おう、そうだ」

「もうこんなに……」

村雨は俺が片づけた書類の束をパラパラと縁を指でなぞつた。

「村雨にはいつも世話になつてるからな。今日はゆっくりしていいぞ」

俺が若干胸を張つて自慢げに言うと、村雨は小さくため息を吐いて苦い笑顔を浮かべた。

「……やつぱり、ちょっと優しさがずれてるのよね」

「なんて？」

「なんでもないわ。それと私、提督と執務するのは嫌じやないわよ？むしろ好きなくらいい」

「え、そうなの？」

執務なんて好き好んでやるようなものじやないんだし、そんな感想が彼女の口から出でくるとは思つてもいなかつた。

「だつて提督と一緒にいるのは楽しいもの」

「つ……」

面と向かつてそんなことを言われてはどうにも照れ臭く、俺は村雨からわずかばかり視線をずらした。

「だから、終わつたらいっぱい村雨を構つてね」

「もちろんだ」

そこまで艦娘に言われて応えなければ提督の名折れ。残つた仕事が片付いたら思う存分村雨を可愛がろう。

村雨は紙束を半分ほど取り、秘書艦用の机に着いた。
「よし！ 村雨のちよつといいとこ見せたげる！」

お昼寝わんこ

春の陽気が訪れ、気候穏やかな季節。ここ最近は深海漁艦の進行もなく、この鎮守府は穏やかな空氣に包まれていた。

「じゃあ提督、僕は開発の依頼をしてくるよ」

「ん、頼んだ。それ終つたら一六〇〇まで休憩していいぞ」

「わかった。行つてくるね」

本日秘書艦の時雨はそう言い残して部屋から去つていく。その背中を見送ると、俺は再び室内に目を向けた。

「んで? 夕立は何しに来たんだ?」

時雨と入れ替わるようにして入つて来た夕立はいつもと違つてどこか元気がない。

彼女の紅い目があまり開いておらず、その足取りもどこかおぼつかない様子。端的に言うととても眠そうだつた

「……おねむっぽい」

「わざわざここに来んでも……」

百隻近くの艦娘の中でも、白露型の面々は執務室に来ることが多い。特に夕立はこと

ある」とにこうやつて遊びに来てたりする。

眠たいなら自室で寝りやいいのに。ベッドどころか布団もない、せいぜいうつすい毛布があるくらいのここじやさぞ寝心地悪かろう。

「提督さんお仕事は終わつたっぽい?」

「聞いちやいねえ……。」

「ああ、今ちょうど休憩中だよ」

「じゃあ一緒にお昼寝するっぽい!」

「わかつたから袖引っ張るなつて!」

夕立に連れられて季節外れのこたつの中に連れ込まれ、流されるままに入り込んだ。一度仕舞おうとはしたんだが、白露が駄々こねまくつて結局そのまま放置してんだよなあ。

座布団を枕にして寝転ぶと、夕立は俺の上にうつ伏せでのしかかつた。こんな体でどこからあんな火力が出るんだって程に彼女の身体は軽い。

「夕立、ちゃんとご飯食べてるか?」

「?? 凤翔さんのご飯はおいしいからいつもおかわりしてるっぽい!」

「そうか。ならないんだが」

その栄養はどこに……。もしかしてこの駆逐の娘にしては厚めの胸部装甲か? 改二

になるまではこんなスキンシップも気にならなかつたんだが、今は少し、ほんの少しまずい。

邪氣はなく、純粹に愛でようと顔だけこたつから出した夕立の髪の毛を梳くように撫でると、彼女は気持ちよさそうに瞼を閉じた。

「てーとくさんの手、優しくて安心するっぽい……」

「それは良かつた」

そのままゆっくり撫で続けていると、やがて腹の上から安らかな寝息が聞こえ始めた。

ふにゃふにゃに緩みきつた彼女の寝顔を見ていると、俺もだんだんと眠くなつて——

× × ×

「提督、開発成功したよ……つて寝ちゃつてるし」

工廠から帰ってきた時雨はコタツムリと化した提督を見つけて、大きく肩を落とした。

「提督起きて、そんなところで寝たら風邪ひくよ……つて、あれ？」

提督一人分にしては明らかに膨らんだ布団をまくると、夕立が提督にしがみ付いて眠つている。

「夕立まで……」

時雨は少し乱れた夕立の前髪を手で揃え、彼女の頬を人差し指で軽く突くと、それに反応したのか夕立は『ぱい～……』と指を避けるように小さく首を動かした。

「でも一人とも、すぐ気持ちよさそう。そんなの見てたらぼくも……ふああ……」

突如睡魔に襲われた時雨は数度瞬きしたあと、提督と夕立が眠る炬燵をまじまじと見つめた。

「これだけ眠いとまともに執務もできそうにならないし、もとはと言えば提督のせいだから仕方ないよね、うん」

何の責任を提督に押し付けているのか本人さえわかつていながら、時雨は自分に言い聞かせるように呟いた。

「提督。隣、失礼するね」

時雨まで同じ場所に入つたせいか窮屈そうに見える三人はしかし、皆が幸せそうな寝顔を浮かべていた。

ぶつきー、キレる

のどかな春風が開いた窓から吹きおろし、ちょうど手を離していったのか春雨の目の前にあつた書類が宙を舞い、少し離れたところにいた吹雪のところに飛んでいった

「あつ。すいません！すぐ拾います！」

「大丈夫、私が拾うよ」

「あ、ありがとうございます」

慌てて立ち上がりこうとした春雨を手で制し、吹雪は拾い終えた書類を手にしたまま時計を見て、俺達に笑いかけた。

「ちようどいい時間ですし一休みしましようか司令官、春雨ちゃん

「だな」

吹雪が発したその言葉に俺はペンを置き、続いて春雨もきりよく書き終えたところで大きく背中を逸らした。

「んつ、ふう……」

「お疲れ様、春雨

「いえ、私はまだまだ大丈夫です！」

春雨は、むんつと気合を入れ直すようにぞいの構えをとる。

その間に吹雪はポツトに水を入れながら棚からカップを取り出した。

「二人はコーヒーか紅茶、どつちがいいですか？」

「今日は紅茶かな」

「吹雪さん、私が淹れますから！」

「いいからいいから。春雨ちゃんはどつちがいい？」

先輩にやらせるわけにはいかない、と焦る春雨だが、吹雪はそれを許そとしなかつた。吹雪が任せる気がないことを悟つた春雨は渋々ながらも引き下がる。

「……紅茶でおねがいします」

数分後、吹雪が淹れた紅茶と春雨が持つて来てくれたクッキーを並べて、すっかりティータイムの準備ができていた。カップに注がれた紅茶を一口含んで、吹雪の方を見る。

「吹雪もありがとな。非番なのにわざわざ手伝つてくれて」

「いえ、私が好きでやつてることですから！」

「……確か前のときも手伝つてくれたよな。そろそろちゃんと休めよ？」

「そう言う司令官こそ休み取つてるんですか？」

「うつ……」

「司令官が休まないのに私が休むわけにはいきません！」

「参つたな……」

前線で戦う彼女たちには十分な休息をとらせなければならないのだが、吹雪はなぜか俺よりも多く休むことを嫌う。こういうところは眞面目じやなくともいいんだけどな……。

その横で俺達の会話を聞いていた春雨は、どこか気落ちした様子でうつむいた。

「すいません、私、非番の日に呑気に休んでて……」

「いや、それでいいからな？こいつが働きすぎなだけだから」

「司令官は人のこと言えないじゃないですか」

吹雪も俺も頑として譲らず、このまましばらく言い争つていそうだったが、春雨がふと口を挟んだおかげで中断された。

「そういえば司令官と吹雪さんつて仲いいですよね。その、遠慮がないというか」

「まあ吹雪は初期艦で一番付き合いが長いからな」

「一年前は私と司令官しかいなかつたんだよ？」

「ちょっと信じられません」

今では百人近くいるこの鎮守府も、始まりは俺と吹雪だけだつた。

俺たちは懐かしむように揃つて執務室を見渡した。

「最初はこの執務室もミカン箱しかなくてな」

「懐かしいですねえ……。真っ先にあの机を買つたんでしたよね」

「そうそう」

「……ちょっと羨ましいな」

「？」

「いえ、なんでもないです！」

ポツリ、何かを呟いた春雨はどこか物憂げで、俺と吹雪がそんな彼女を訝しく思つた、ちょうどその時だつた。

「ティーのスメルがするね！」

バーン！とけたたましい音と共に扉が勢いよく開かれる。もう顔を見なくとも誰がやつたのかわかつてしまう。

紅茶あるところに彼女あり。英國淑女の金剛がティーセットの匂いにつられて執務室に現れた。

「ティータイムならミーも混ぜるね！」

「……金剛さん？」

「ひつ……、ぶ、ブツキー!? ホワイ!? 今日のシークレッタリーはハルサメのはずじゃ!?」

「ちょっと手伝つてたんですよ。で？」

吹雪はつかつかと金剛の方に歩き出す。金剛は気圧されたように後ずさる。

やがて金剛は壁に退路を阻まれ、ついに吹雪と対面した。

「前にも言いましたよね、ドアは静かに開けてくださいって。金剛さん、それで今までに何回壊しました？」

両手を腰に当てて怒氣を露わにする駆逐艦の吹雪に、戦艦の金剛がすっかり怯えている。

何度見ても面白いなこの光景……。

「に、二回ネ……」

「二回目の時私がなんて言つたか覚えてますよね？」

「……『次は許しませんから』」

「はい、その通りです」

吹雪の口元はにつこりと笑つてゐるが、しかしその目に一切の慈悲はなかつた。

「それで、どういうつもりですか？」

「ソレは、その……」

「あの、司令官？」

「どうした？」

春雨はおろおろと俺の顔と吹雪たちの方を交互に見ながら俺に尋ねた。

「これは、その、どういう……？」

「この鎮守府には鉄の掟があつてな」

「鉄の掟？」

春雨のような新人出なれば誰でも知つてゐる絶対のルール。つつても金剛と卯月、時々白露以外はめつたに破らないが。

『絶対に吹雪を怒らせるな』だ。普段は優しいし真面目でいい娘なんだが、怒るとめちゃくちゃ怖いんだよ』

「みたいですね……』

それから長く続いた金剛への説教が終わる頃には、すっかり吹雪の紅茶は冷めていた。

春雨イド

執務室の中央から少しそれたところに置かれた予備の机。先日吹雪が使っていたそれの上には今、大きな紙袋が乗っている。

本日の秘書艦春雨は中身が気になるのか、不思議そうに眺めていた。

「司令官。これ、なんですか？」

「ああ、それは……」

俺がどう伝えるべきか躊躇つていると春雨はますます好奇心に駆られたのか、袋の方をちらちら見ていてる。

「気になるなら見てもいいけど。……俺の趣味じやないからな？」

「？。どういうことですか？」

俺は質問に答える代わりに手で袋を開けるように促すと、春雨はおつかなびつくり中身を取り出した。

「えっと、司令官、これは……？」

「メイド服、だな」

「司令官にそんな趣味が!?」

「だから違うってさつき言つたじゃん!?」

心底驚いた風に大きな声を出した春雨に俺は慌てて反論した。それで落ち着きを取り戻したのか、春雨は息を吐いてから改めて俺に向き直った。

「それで、どうしたんですかこれ？」

「ちょっと知り合いから貰つてな」

舞鶴の方の鎮守府を運営している俺の同期の提督からつい先日送られたきた。曰く、『うちで余つたからやるわ』とのこと。メイド服が余る鎮守府つてなんだよ……。てい

うかいつ使うんだよこんなの……。

だがしかし、好きか嫌いかで言えば大変好きなわけで、さらにそれを春雨が着てくれようものならあまりの可愛さに悶えてしまうことはもはや自明の理。

「でも見てみたくはあるな」

「私でよければ着ましょうか?」

「え、いいの?」

「はい! 司令官がおっしゃるのでしたら!」

冗談半分期待半分だったのだが、春雨は快く引き受けてくれた。眩しい笑顔で答えてくれた彼女に邪な目を向けるのが非常に申し訳なく、俺は春雨から目を逸らした。

しかし罪悪感があるからと言って、頼むかどうかとはまた別の話なわけで。

「ぜひ頼む」

「はい♪」

春雨が着替えるので一度俺は部屋から出て準備が終わるのを待つ。中からシユルシユルと衣擦れの音が断続的に聞こえてきてさつきからずつと落ち着かない心地だった。

『司令官、着替え終わりました!』

「ん、入るぞ」

扉を開けると、そこは桃源郷だった。

「えっと、どうでしようか……?」

春雨は慣れない衣装だからか、腰をねじつたりスカートに軽く触れたりして具合を確かめている。そして俺を見つめる彼女の瞳は、どこか不安げに揺れていた。

『メイド服と少女』

『相利共生』

『この世には組み合わせるべくして生まれてきたと言つても過言ではない関係が存在する』

『スク水と幼女! セーラー服と少女! 洋衣と貧乳! 相利共生は個々のポテンシャルを最大限に引き出す!』

『男の大多数はメイド服が好きであり、提督も例にもれず煩惱にあふれた人間』
 『そしてここに春雨という容姿端麗な少女が一人……』

『二つの存在の愛称は彼の目にどう映つたか……』

「か、」

かわええええええ!!

『奇跡的相性（マリアージュ）』

だめだ、あまりの可愛さに頬が緩む。

だが俺は仮にも彼女の上官。無様な姿は見せられない……！

「ああ、よく似合つている。可愛いぞ春雨」

「ふえ？ ほ、ほんとですか!? えへへっ」

可愛らしく喜ぶ春雨が気付かぬうちに、俺はハンカチで口元を流れる血を拭つた。

褒められて嬉しくなつたようで彼女はその場でクルつと一回転。片側で結んだおさげ髪に遅れて、膝下ほどの丈のスカートがふわりと舞つた

だめだ、また頬がつ……!!

「……あの、司令官？」

「ん？」

「後ろに、その……」

一時たりとも目を離したくなかったが春雨に言われて渋々後ろを向くと、窓の上側から薄く紫がかつた髪の束が垂れている。そして少しずつ『ソレ』が降りてきて、やがて現れた双眸が俺達を射抜く。具体的にはメイド服を着た春雨と、それに歓喜する司令官という状況を。

「……」

「……」

「青葉、みちやいました！」

「アオバワレエ!!」

翌日。朝一で張り出された号外を見た時雨に『僕の妹で遊ばないでくれないかな?』と怒られ、吹雪からはジト目で見られたりと散々だつた。

だがその代わりに春雨イドの写真を青葉からごうだ……貰つたので良しとしよう。

病み時雨

「時雨が風邪引いた?」

早朝の静けさに包まれた執務室に俺の声が木霊する。

「今本当ならここにいるはずの時雨に代わり、村雨が開口一番にそう伝えてきたのだ。

「そうよ、だから今日は私が代わりに秘書艦するからよろしくね」

「ああ。こちらこそよろしく頼む」

そして何事もなかつたかのように二人で書類と戦い始めたのだが……。

「ここ間違つてる」

「あ、悪い」

「ここも数字ずれてるわね」

「マジか。ごめん」

「珍しいわね提督、ミスが多いわよ?」

「うつ、すまん……」

「あまりに心ここにあらずな俺を見て、村雨は小さくため息を吐いた

「まだ昼前だけど休憩にしましようか。集中できていないみたいだし」

村雨は席を立ち、棚からマグカップを取り出してコーヒーを淹れてくれた。

「はいどうぞ」

「ありがとう」

冷めないうちに啜ると苦みと共に熱い液体が喉の奥を通り過ぎていく。

カタツと音を鳴らしながらカップを置くと、俺は村雨に時雨のことを尋ねた。

「ところで時雨は大丈夫なのか？」

「そんなに心配なら様子見に行つたら？」

「だが執務が……」

提督である以上私情で仕事を放りだすわけにいかず、しかしながら艦娘のケアもまた提督の仕事。

板挟みに囚われた俺を見て村雨は呆れたように肩をすくめた。

「もう、時雨姉さんと仕事、どっちが大事なの？」

「時雨」

もちろん時雨だけでなく村雨や吹雪たちも含めて、この娘たちより大事なものなど存
在しない。

「じゃあなら行つてあげて。書類は私が何とかするから」「すまん、すぐに戻る」

「ごゆつくり」

ガタツと音を立てて立ち上がった俺に向かって村雨はひらひらと手を振った。

「あ、提督。かえつて来たら村雨も構つてね」

「任せとけ」

こう見えて意外と寂しがりやだからな、村雨は。

白露型の部屋の扉をノックすると、奥から少し掠れた声が聞こえてきた。

『……はい？』

「俺だ。入つていいか？」

『提督？』

ガチャツと音がして扉がゆつくり開くと、中から淡い藍色の寝間着を纏つた時雨が現れた。

「どうしたの？」

「見舞いだ。入つていいか？」

「うん、もちろんだよ。ちょうど暇してたんだ、話し相手になつてよ」

時雨に続いて部屋の中に足を踏み入れ、季節外れのことたつに一人で入つた。

「もう大丈夫なのかな？」

「薬飲んで寝たら結構マシになつたよ。心配してくれてありがとう」

「ん、今日は一日休んでいいからちゃんと治せよ」

「うん。姉さんと村雨にはお礼言わないとね。姉さん、朝からずっと看病してくれたんだ。大げさだつて言つたんだけどね」

時雨は照れくさそうに頬を搔いていたが、その口元は嬉しそうに歪んでいる。

「へえ、白露がねえ」

今は遠征に出ていて姿が見えないが、ついさっきまで熱心に看病をしていたらしい。なんだかんだ言つても流石は長女ということか。

「さて、俺はもう行くよ。村雨に怒られる」

実際はゆつくりして来いと言われたが任せつきりにするわけにもいくまい。

別れ際、時雨は申し訳なさそうに目を伏せた。

「ごめんね提督、迷惑かけて。この分はきつと取り返すから」

さらに彼女は去ろうとする俺の背中にそんな言葉を投げかける。

つたく、お前はいつもいつも責任を感じすぎだ。

俺は振り返つて時雨の頭を撫でた。そして、ハツと顔を上げた時雨に向かつて笑いかける。

「迷惑上等だ。俺はお前らの提督だからな」「ふふつ、なにそれ」

時雨は口元を抑えながら微かに笑い声を漏らす。それから僅かばかり間を置いて、俺のことを呼んだ。

「提督」

「ん？」

「ありがとう！」

「……どういたしまして」

軍帽を目深に被り、今度こそ俺はこの部屋を後にした。

病める白露

つい先ほどコーヒーを淹れたマグカップから湯気が立ち昇り、仄かに漂う香りと共に部屋の中に立ち込める。

本日の秘書官は白露。

彼女は執務が苦手なので調子はどうかと思い隣を見ると、白露が辛そうに書類と向き合っていた。いつもの『事務仕事やだー』というのとはまた違う、しんどいのを我慢しているような表情に見え、俺はたまらず声を掛けた。

「白露、なんか顔色悪いが大丈夫か？」

「え？あ、うん。大丈夫……！」

古参の一人である白露との付き合いももう一年近い。そんな彼女の強がりを見抜けない程この期間は短くないのだ。

「嘘つけ。ちょっと触るぞ」

「うえつ！」

俺は白露に熱があるか確かめるため、彼女のライトブラウンの髪をかきあげ、俺の額を彼女のそれに押し当てる。

やはり幾ばくか熱く感じ、さらには頬もうつすらと赤みを帯びている。

こないだ時雨の看病していたみたいだし風邪が感染ったか？

「やつぱり熱いな。もう今日はいいから戻つて休め」

「熱いのは提督のせいじゃないかな、なんて……」

白露は頬を隠すように俯いて目線を逸らした。

「あほなこと言つてないで早よ寝ろ」

「でも、久しぶりの秘書艦だし、提督、最近忙しくて構つてくれないし……。だから、その……」

彼女の声は妙に歯切れが悪く、尻すぼみになつて言つたこともあつて最後の方は聞こえなかつた。けれどまあ、何が言いたいかくらいは分かる。

白露は秘書艦業務が苦手だから嫌なのかと思つて当番を減らしていた。多少の時間があつてもわざわざ会いに行こうとはしなかつた。

俺が自嘲気味に大きくため息を吐くと、白露はビクッと肩を震わせた。

まつたく、休めと言つてゐるのに吹雪といい白露といい、何でこの鎮守府にはこういうときだけ聞き分けの悪い艦娘が多いんだか……。

「今度どつか連れてつてやるからそれで我慢してくれ」

「いいの……？」

まだ顔を俯けたまま、白露は躊躇いがちに上目遣いで俺の目を見てくる。俺の言葉が本当かどうか確かめるようにな。

「ああ、もちろんだ。ただし白露が元気になつたらな」

「……約束だからね！」

白露は喜びの色を露わにして笑顔を浮かべた。今度は強がつたものではなく、いつも向日葵のような眩しい笑顔。

やつぱり白露はこうじやないとな。

「だから今は休んでくれ」

「うん！ 白露、帰投します！」

「お大事に」

バタンと扉が閉まり、一人残された俺は秘書艦机の上に置いてある書類を取り上げた。

「つし、やるか！」

今日は少し早く終わらせないといけない。俺は自分で頬を軽く叩いて気合を入れ、ペンを走らせた。

× × ×

鎮守府の長い廊下に夕暮れ色の日差しが差し込み、影が長くなつた頃。白露型姉妹の

部屋の扉を数度叩き、俺は物音を立てないようゆっくり中に入つた。

「あ、提督。姉さんの見舞い？」

「えつ、提督！」

ベッドの横で白露の看病をしていた時雨が俺の姿を見つけ、白露も時雨の声で俺が入ってきたことに気がついた。他の白露型姉妹は遠征に言つてるのでこの部屋にいるのは俺達三人だけだ。

「提督。僕はおかゆを作つてくるから、姉さんをお願いしていい？」

俺が頷くと時雨は安心したように微笑んで、俺と入れ替わるように部屋から出て行つた。

俺は先ほどまで時雨がいた椅子に座り白露の様態を見ると、朝よりは顔色がよくなつているようではつとした。

「よかつたの？忙しいんじやない？私が休んじやつたし……」

「仕事はちゃんと終らせてきたさ。だから安心して休め」

風邪で心も弱つてゐるのか、普段ならめつたに見れない落ち込んだ顔で尋ねてくる。俺は白露を安心させようと、彼女の頭をゆづくりと撫でた。

「えへへつ。……風邪ひいてちよつと良かつたかも」

「馬鹿なこと言うなよ。みんな心配してんだから」

「わかつてゐよ……。言つてみただけ」
白露の口調にはまだどこか霸氣がない。やはり多少マシになつたとはいえ体調がよくないのだろう。

氣を使わせても仕方がないし、病人の部屋にあまり長居するものではないか。それに、俺よりも姉妹の時雨にいてもらう方が白露も安心できるだろう。

「俺はもう戻るよ。時雨を呼んでくるから少し待つていてくれ」
「もう行つちやうの……？」

白露は寂しきに立ち上がりろうとした俺の軍服の裾を摘まんだ。その力は弱弱しく、振りほどこうと思えば容易にそうできた。しかし彼女の表情を見てしまうとこれ以上足が前に進まない。

「あと少しだけここにいて欲しいな……、だめ……？」

「……わかつたよ、お前の気が済むまでいる」

「やたつ！」

結局その日は白露が薬を飲んで寝るまで一緒にいたのだった。

× おまけ ×

「お姉ちゃん復活つ！」

翌日、すっかり元気になつた白露は俺と時雨がいる執務室に顔を出していた。

「姉さんごめんね、風邪感染しちやつて」

「気にしない気にしない！それにいいこともあつたし」

「いいこと？」

俺が気になつて訊いてみると、白露はまるで村雨のような蠱惑的な笑みを浮かべた。普段見れないものだが、不思議と彼女に似合つていて一瞬目を奪われてしまった。

「提督には教えないからっ！」

「ええ……」

パンツパンツです！

「司令官、ちょっとお手洗いに行つてきますね」

「ん」

一通り仕事が終わって休憩していたところ、おもむろに立ち上がった吹雪はそう言い残して執務室を出て行つた。

先ほど吹雪が淹れてくれたコーヒーに口をつけて一息ついていると、扉が開かれる音が聞こえた。

「おかえ——」

り、と続けようとした俺の言葉は、しかしながらそこで止まってしまった。吹雪のスカートが巻き込まれて完全に捲れている。その結果彼女の下腹部を覆う純白の下着が眼前に晒されていた。

俺はどうするべきだろうか……？

- 1 正直に指摘する
- 2 黙つて吹雪が自分で気づくのを待つ
- 3 ガン見

※好きなルートを選んでください

1

「吹雪、その、下着見えてるぞ……」

「へつ？～～つ！！／＼／＼

俺が目を逸らしながら伝えると吹雪はゆっくりと顔を下げ、俺の言葉の意味を段々理解していく。彼女は熟れたリングのように顔を真っ赤にして、慌ててスカートを直した。

「あの、見ました……？」

指摘したんだからどうあがいても見てるんだが、一応否定しておくのが優しさという物だろう。

「いや、見てないぞ」

「さつき見えてるって言つたじやないですかあ～～！」

どないせいと。羞恥に染まっているのを隠すためか身体ごと顔を背け、さらにはその場にしゃがんでブルブルと震える肩でその頬を隠している。

「うう……教えていただいてありがとうござります……」

うつすらと涙が滲んだ目じりを少しだけ覗かせて、それでも俺にお礼を言う吹雪はやはり眞面目で可愛い。

……うちの娘ら、大破はそうでもないけど中破はよくするからもう見慣れてるんだけどな。なんて言つたら今度こそぶたれそなうなので黙つておいた。

2

しばらく待つていたものの吹雪が気付く様子もなく、ただ時間だけが過ぎていった。
「提督、ちょっとといいかい？」

コンコンと扉を叩く音と共に時雨の声が聞こえてくる。

吹雪がこんな状態である今、ここに入れるのはまずいか？でも緊急の用事ならそつちの方が大事だし……。

「うん、大丈夫だよ時雨ちゃん」

などと考えている間に吹雪が時雨を招き入れてしまつていた。スカート捲れたままで。

「吹雪それ……」

時雨が少し躊躇いつつも指を向けた場所にあるのは穢れなき衣。そして吹雪が指先の軌跡を追つて徐々に視線を下げていく。

「ぐつ!!//／＼

瞬間、彼女は湯沸かし沸騰黄の如く顔を真つ赤にして、慌ててスカートを直した。そして氣付いていたくせに何も言わなかつた俺に非難の目を向けてくる。

「何で言つてくれなかつたんですかあ!?」

「いや、ほら。知らぬが仏つて言うだろ」

「どうか男の俺に教えられるのもそれはそれで嫌だろうに。

「でも教えて欲しかつたです……」

「……すまん」

それからしばらくの間不貞腐れたままだつた吹雪を宥めるのは少し大変だつた。

3

こうもおおっぴろげにされとは見ないわけにはいかない。マジマジと凝視する俺の視線を不思議に思つたのか、吹雪もその先を見つめ、慌ててスカートを直した。それから徐々にその真つ赤に染まつた顔を上げた。

「……しぐれ～い～か～ん～？」

ジト～っと俺を睨む視線から目を逸らし、下手な口笛を吹いていると吹雪がズイツと距離を詰めてきた。

流石に蔑ろにすることもできず、俺は小さくため息を吐いた。

「悪かつたつて。間宮のアイスおごつてやるから許してくれ」

「……」

「ほら、間宮券」

「……つーん」

吹雪は受け取り拒否して顔を背けた。こんな吹雪を見たのはいつ以来だろうか。

「二枚でどうだ？」

「……司令官が直接奢つてくれないと許しません」

……それ、間宮券二枚の方が得なんじやないか？だが吹雪がその程度で機嫌を直してくれるなら乗らない手はない。

「わかったよ、今からいくか？」

「はいっ！」

× × ×

甘味処間宮、居酒屋鳳翔。その日食堂当番ではない方の艦が担当することには、ときには甘味処、ときには酒場と艦娘たちの憩いの場となっている。一部の駆逐艦娘の間では『ここに通うようになつたら一人前のレディ』なんて噂が流れているらしく、たびたび暁の姿が目撃されているらしい。

挨拶してくる娘たちの横を通り抜け、吹雪と奥の方の席を取つた。

「はい、吹雪ちゃん。苺パフェよ」

「わあ、いただきますね！」

間宮が持つてきたのは鮮やかに彩られたパフェ。

吹雪もやはり女の子、デザートを前にすっかり機嫌を直していた。なら最初に何でつれないままだつたか不可解だが……、あれか。意趣返しに間宮券を使わせないことで俺の財布にダメージを与えるようとしたのか。だが残念、パフェの一つや二つで揺れるほど軍人の給与は安くないのだよ。

「提督は何か食べられますか？」

「じゃあタルトを貰おうかな」

「はい♪」

間宮のタルトはくどくなくて甘いものがそれほど得意でない俺でも食べやすい。

「美味しいか？」

「はいっ、美味しいです！ありがとうございます司令官！」

すっかり満足してくれたようだな、よし。

「じゃあパンツのことはチャラで」

「もう、思い出させないでください……」

それから吹雪が幸せそうにパフェを頬張る姿を見ながら、俺もタルトにフォークを伸ばした。

ブランデー春雨

「そういえば司令官、あれなんですか？」

執務を手伝つてくれている今日の秘書官、春雨が見つめる先には小さめの袋が置かれている。前回のとは違い、今度のはや『……やましいものではない。

「ん？ ああ、それは……」

「……もしかしてまたコスプレですか？」

「違う！」

確かに春雨のメイド服姿は可愛かつたけども！ 僕、そんな趣味ないから。忘れて！

「鈴谷と熊野が差し入れと言つて持つて来てくれてな」

「わあ、チヨコレートです！」

「ちようどいい、少し休憩にしようか。コーヒーを淹れてくれるか？」

「はい！ お任せください、ですっ！」

甘いものにはコーヒーと相場が決まつてているのだ。

春雨が席に着いたのを確認して、まずは一つ目を食べる。ふむ……。僕が甘いものが得意でないということを考慮してくれたのか、少し大人っぽいビターな味わい。そして

中から出てくるのは……酒か？なるほど、これはいいものだ。

「あつ、このチヨコ美味しいです！」

春雨も気に入つたようで、上機嫌そうに口の中でチヨコを転がしている。

「だな、あとで鈴谷と熊野にお礼言つておくか」

「はい！私も言わなきやですね！」

俺は二つ目チヨコを口に放り入れた。うん、やはりうまい。にしてもブランデーチヨコか。いや、まさかな……。

俺が三つ目を食べようとしたとき、目の前には既に大量の空の包装が破り捨てられていた。

「おい、春雨？そのくらいで止めといた方が……」

「いやれす！」

呂律の回らぬ舌足らずな声

額を流れる汗が不快感を脳内に伝える。いやいや、たかがブランデーチヨコだぞ？そんなどあるわけ——。

「しれえかん？」

キヨトンと首を傾げ、蕩けた目で俺を見つめる春雨。
あかんこれ。間違いなく酔つてる。

「しれーかん！」

春雨は正面から移動して俺の隣に座った。しかしそれだけではとどまらず、しばらくの間じつと俺の顔を見たかと思えば、にへらと笑つて俺の膝の上に乗つてきた。

「えへへつ♪」

可愛い。……じやなくて。

「春雨、おりt」

「だめですか……？」

涙目十上目遣い。それはざるいと思うのです。これで断れる奴男じやねえよ……。

「いや、いいよ」

「やつたあ！」

春雨は嬉しそうに、俺の膝の上でパタパタと足を揺らす。

スーパー可愛い。

「くく♪」

「はあ……」

懷いてくれるのは嬉しいんだが、この状況は少し慣れないな。

俺は複雑な感情をため息に込めて吐き出す。またたまにはこんなのもいいかな。

だが、甘えんぼう春雨の要求はそこで終わらなかつた。

「しれえかん、頭、撫でてくれませんか？」

「はいはい……」

「んつ／＼／＼

今の春雨に話は通じない。酔いが覚めるまではある程度なら好きにさせてあげよう。

春雨の頭に手を置くと彼女は艶っぽい声を漏らし、俺は身体を震わせた。心臓に悪いからそういうのやめよう、な？

「ふああ……」

そのままいつも夕立にやつて いるように前後にさすると、春雨は気持ちよさそうに背中を預けてくる。

ハイパー可愛い。

この後遊びに来た夕立が羨ましがつて撫でるよう迫ってきたのはまた別のお話。

からかい上手（笑）の鈴谷さん

「今日の秘書艦はつと……ああ」

俺が秘書艦を確認し、何とも言えない声を漏らしたとほぼ同時に部屋の扉が開いた。

「提督、ちーっす！」

「鈴谷か……」

「何その反応!? ひつどーうい！」

だつてなあ……。

早速業務に入つてもらうと鈴谷はかなりハイペースで書類を捌いていく。

鈴谷は大淀や霧島、吹雪ほどではないがかなり執務ができるし、お茶もコーヒーも美味しいものを淹れてくれる。さらにはよく気が利いており、いいお嫁さんになりそうな娘だ。

「提督うー、鈴谷暇なんですけどお。終わらないなら手伝おつか？」

昼過ぎには彼女に割り当てられた仕事をやり終え、執務室に備え付けられたソファに座つて何やら雑誌を読み始めた。

「もう少しだから待つてろ」

「ほーい」

口ではいろいろ言っているが、彼女が俺の仕事を邪魔したことはないし、公私の分別もちやんとついている。

つまるところ大変有能な秘書艦なわけだが、何が問題なのかと言うと……。

「あ、終わつた？どうする？ナニする？」

鈴谷は制服の胸元を緩め、俺に見せつけるようにひらひらと扇ぐ。

そう、これなのだ。彼女は『公』の時間は大変優秀なのだが、『私』になつたとたん駆逐艦娘にはあまり見せたくないような感じで俺をからかい始める

「鈴谷。そんなことばつかしてたらしまいにひどい目に遭うぞ」

「別に誰にでもやつてるわけじやないよ？提督だからやつてんの！」

そう言つて鈴谷はソファの上で膝を抱えた。俺の位置からだと彼女の下着が足に隠れて見えそうで見えない。

またそうやつて煽るようなことを……。何か起きてからでは遅いし一度ちよつと脅しをかけておくべきか？そしたら流石に鈴谷も懲りるだろう。

「鈴谷」

「ん？ なに……つて、ひや!?」

俺は鈴谷をソファに押し倒した。互いの距離は近く、彼女の荒くなつた呼気が微かに

俺の顔に触れる。

「え、ちよつ、提督ダメだつて！まだ心の準備が……」

鈴谷が俺を遠ざけようとワタワタと手を必死に振る。そんな顔真っ赤にするくらいなら最初からやるなって……。

「とまあ、こんなことになるから揶揄うのもほどほどにな」

「ふえ？」

「詫びと言つては何だが食堂にでも行くか？奢つてやるぞ」

多少の罪悪感を拭うために俺がそう誘つても、鈴谷は口を開けて呆然としたまま動かずについた。

そろそろどかないとまずそうだと思い、足を動かそうとしたその時。

ギイツという音と共にゆっくりと扉が開かれてゆく。

「司令官、しつれい s……」

「……」

「……」

「……」

無言。俺が鈴谷を押し倒しているのをみた春雨も、鈴谷に覆いかぶさる俺も、呆けたままの鈴谷も、誰一人何一つ音を発さず静寂が空間を包んでいた。

「ゞ」、

やがて春雨が出した声が沈黙を打ち破る。

「ごゆつくりどうぞお～～!!」

「春雨ええ!?」

扉を開けっぱなしにして駆けてゆく春雨の背中に手を伸ばすが、鈴谷をこのままにしておくわけにもいかず、とりあえず上からどいて様子を見守った。

「鈴谷?」

「馬鹿あ！」

「うお!？」

大声を上げた鈴谷に驚いてたじろいだ俺に、彼女はソファに座り直してからさらには捲し立てる

「このデリカシーなし！女たらし！鈍感提督う！」

またひどい言われようだな……。自業自得だから仕方ないんだけど

「ほら行くよ！」

急に立ち上がったかと思えば、鈴谷は俺の手を引いて部屋の外に連れ出し、そのまま

前を歩いて行く。

「えつ、どこに？」

「食堂。奢ってくれるんでしょ。それで許したげる」

そう言つて初めは速足で廊下を歩いていたのだが、鈴谷はふと立ち止まり、何か言いたげに指で毛先を弄びだした。

彼女が切り出すのを待つていると、何かの決心がついたのか、鈴谷はゆっくりと口から声を漏らした。

「それと、その……、ごめんなさい。次からは気をつけるね」「俺も悪かっただよ。やりすぎた」

お互いが謝ると、鈴谷は手を打つて頬を釣り上げた。

「よし！この話はこれで終わりっ！」

「じゃあ奢らなくとも——」

「それとこれとは話が別ですう」

「冗談だ。ちゃんと奢つてやるよ」

「鈴谷、今日は赤城さんぐらい食べれるかも」

「やめろ。財布が死ぬ」

「冗談だつて」

「胃に悪い冗談だな、両方の」

「上手いこと言つても誤魔化されないからね？」

軽口をたたき合う鈴谷との会話は、あまりこういつた娘がいないだけに新鮮なものだつた。

お花見

「ふう」

ため息を吐いてカーテンの隙間から窓の外を見ると、満開に咲いた桜が春風に吹かれて花弁を散らしている。

さらにその下ではたくさんの艦娘たちが呑めや歌えやの大騒ぎ。壁越しでも少し声が聞こえるほどには楽しんでいるらしい。

机に置かれた酒をちびちびと煽つていると扉が開かれ、その奥から一人の艦娘が入ってきた。

「何やつてるんですか司令官？」

「吹雪か」

「みんな寂しがつてますよ。早く行きましょウ」

「だが……」

今日は海域を攻略してくれた皆の祝勝会を兼ねたお花見。今回の作戦では無難な指示しか出せず、勝てたのはひとえに彼女たちのおかげ。それなのに俺があの場に交じるのはどうしても憚られるのだ。

「電ちゃん、『司令官、来ないので……?』って泣きかけてましたよ」「うぐつ……」

付き合いの長い吹雪は俺がどうやつたら折れるか大体わかっているので、全力で罪悪感を煽りにきた。

「隼鷹さんも『提督が来るまでは飲めねえなあ』って」「いや、めっちゃ飲んでない?」

桜の下には花より酒と言わんばかりにジョッキを呷る隼鷹の姿が。

「あれノンアルらしいです」

ノンアルならいいのか?

「鳳翔さんと間宮さんも司令官のために腕を奮つたつて。瑞鳳さんも卵焼き食べて欲しいつて」「ぐぬぬ……」

「……私も、司令官が来てくれないと楽しめないです」

悲しそうな瞳を吹雪に向けられて、俺はついに折れた。

「わかった俺が悪かった。今行くよ」

「はいっ!」

嬉しそうにみんなの下に駆けて行く吹雪の後ろを、ゆっくりと追いかけた。

× × ×

「あつ、提督。おつそ～い～！」

「しひえ！早く早く！」

「遅いじやないか。待つていたぞ」

「このクソ提督、遅いのよ！」

「ボノたんずつとそわそわしてたもんね」

「うつさい！してない！ボノたん言うな！」

「司令官、まずは一杯どうだい？」

皆が遅れてきた俺の姿を見て次々と声を掛けてくれる。とりあえず響はそのウオツ
カから手を離そうか。

「提督さん、こつちこつち！」

「はいはい」

夕立に誘われてそちらに行くと白露型の娘たちが集まっていた。夕立は俺を座らせ
るとすぐさま膝の上に乗つかつた。

今回夕立はほんとに頑張つてくれたからな。

「♪♪♪」

そつと髪をなでると夕立は気持ちよさそうに声を漏らした。

ふと隣を見ると春雨が落ち着かなそうにちらちらとこちらを見てくる。

「どうした春雨？」

「その……、私もいいですか……？」

春雨は恥ずかしそうに俯きながら俺に尋ねる。春雨も大量の資源を運んでくれたし叶えてやりたいのはやまやまだが物理的になあ……。

「夕立が乗つてるから後でなら」

「でしたら私は腕をお借りします！」

春雨は俺の腕を取り抱えるようにして抱きしめた。節々に柔らかい感触がして、心なしか甘い匂いが漂つてくる。

そんなことをしているとふいに俺の位置に影が差した。頭上を見るとど、こからか歩いてきた時雨が呆れた顔で俺を見下ろしている。

「僕の妹たちを侍らせて何をしてるんだい？」

「もうちよつと何か言い方あるだろ……」

やけに悪意のある言葉を投げかけた時雨は 大きなため息を吐いて俺の隣に並ぶ。

「隣、座るよ」

「ああ」

それから時雨は一言断つて春雨の反対側に腰を下ろした。

皆の調子はどうかと辺りを見回せば、急遽拵えた簡易ステージの上で一芸を拵えてきた艦娘たちが各自の芸を披露している。他の者たちは遠近様々にそれを取り囲むようにして楽しんでいるようだ。

「トップバッターはミー達に任せんネ！アーユーレディ？」

「あーあー、マイクチエック、ワンツー。」

「榛名は大丈夫です」

「気合！入れて！いきます！！」

「あくつ！一番取られた!? 村雨、私達も負けてられないよ！」

「……何で私まで」

「みんなく那珂ちゃんだよー♪」

「歌つていただきましょう、加賀さんで『加賀岬』」

「♪♪♪」

「俺はわいのわいのとはしゃぐ艦娘たちの姿を慈しむような眼つきで遠巻きに眺めていた。

「ずつと、こんな日が続けばいいのにな」

「だつたらもつと頑張らないとね」

「ああ」

また明日から頑張ろう。この幸せと、彼女たちの笑顔を守るために。

時雨桜

「提督、桜を見に行かない？」

夕暮れ時、差し込んだ日差しが執務室を茜色に染め上げる頃。書類の山も一本の指で測れるほどの高さになり、ようやく終わりが見えてきたとき、時雨がそんなことを言つた。

「花見ならこないだしただろ？」

「あの時は花より団子つて感じだつたじゃないか」

「確かにな……」

団子つつうか酒だな。特に隼鷹と飛鷹と那智。

「それに、僕は提督と二人で行きたいんだ。ダメかな……？」

普段こういった風に甘えてくることの少なく、いつも何かしら抱え込みがちな時雨の頼み。それを断ることなんて俺には到底できそうになかった。

「まだ仕事が残つてから歩くだけになるが」

「うん、それでいいよ」

「じゃあ今から行くか」

「うん！」

あまりそういう感情をあらわにしない時雨にしては珍しく、俺の前を歩く彼女の足取りは軽かつた。

× × ×

「桜、綺麗だね」

「ほんとうにな」

「提督がそう思つてくれてよかつたよ」

執務室を出てからしばらく歩き、俺と時雨は鎮守府内の並木道に来ていた。

毎年この季節になると満開の花を咲かせるこここの桜はうちの艦娘たちに人気のスボットだと、ついさつき時雨から教えてもらつた。

春の陽気を帯びた一陣の風が吹き、木々の枝を軽やかに揺らす。

髪が乱れないように側頭部を抑える時雨の姿と、その周りを踊るように舞い散る桜吹雪はさながら一枚の絵画のように美しく、つい見惚れてしまつた。

「ん？ 僕の顔に何かついてる？」

「いや、なんでもないよ」

そうやつて時雨と二人、街行く中で桜を眺めていると、やがてポツリポツリと零が落ち、アスファルトの色を黒く変え始めた。

「あ、雨だね」

時雨が手を仰向けて呟いた。

突如振り出した夕立ちは次第に強くなり、たまらず俺たちは近くにあつた軒下に避難した。

「ちょっと待つてろ」

確かに鞄に折り畳み傘を入れてたはずなんだが、たまたま二本入つてたりは……しないよなあ。

俺は時雨に一本だけあつた傘を差しだした。

「時雨使ってくれ」

しかし彼女はその申し出を拒む。

「いや、提督が持つてきたんだからていとくが使いなよ」

「いやいや、お前こないだ風邪ひいたら。ぶり返さんとも限らんし使えつて」「いやいやいや、もう完全に治つてるから。それより提督に風邪ひかせたら僕がみんなに合わせる顔がないよ」

「もう……」

時雨は俺が雨に濡れることを良しとしない。しかしだからと言つて時雨を雨空の下に晒すのは論外。

……仕方ないか。

「ちよつと狭いが二人で使うか」

「提督が折れてくれないしそれしかないかな」

「そうだな、時雨が退いてくれないからな」

そんなことを言い合つて、俺と時雨は曇天の下に足を踏み出した
ふと隣を見ると時雨のわずかにはみ出した肩が濡れている。そして不自然に開いた

俺と時雨の隙間

どのみち傘の大きさ的に濡れるのは仕方ないけどできる事はすべきだろう。

「もうちよつと詰めるぞ」

「えつ、あ、……うん」

少し強張つた返事を肯定とみなし、俺はもう一步時雨に近づいた。

「時雨は雨が好きなんだつたつけ」

「好きだよ。……それに、いまもつと好きになつたかな、なんて」

「どういうことだ？」

「ううん、なんでもない。気にしないでよ」

「……？ わかつた」

気にはなつたが、時雨の嬉しそうな表情を見ると追及しようとはとても思えなかつ

た。

大天使フルタカエル

「ふあ……」

心地よい春の陽気に包まれて、昨日あまり眠れなかつたこともあつてか、口からあくびが零れ出た。

隣に座る秘書官の古鷹はクスッと笑つて動かしていた手を止める。

「提督、お疲れですか？」

「ああ、毎日こうも仕事があると少し、つてお前たちを前線で戦わせておいてこんな弱音を吐くとはまつたく情けないな。忘れてくれ」

「そんなことありません!!」

古鷹は机の上に手をついて身を乗り出し、彼女が普段あまり出さないような大きな声で俺の言葉を否定した。

「古鷹？」

「私達が戦えるのは提督のおかげですし、十分な休養も貰つてます。だから今の環境に不満なんてありません。でも……」

古鷹は少し躊躇うように視線を這わせる。それから僅かな間目を閉じ、また見開いて

から強い口調で言い放った。

「提督が働きすぎなのはいただけません!」

「だが……」

「お願ひですからもつと私達を頼つてください。それとも、頼りになりませんか?」

それは違う、と言おうとした。でも以前に吹雪に同じことで怒られて、結局また古鷹にこうやつて諭されている。だから今度は口先だけで何かを騙るよりも、ちゃんと行動で示そう。

「古鷹」

「あ、ごめんなさい! 私偉そうなことを……」

彼女の名前を呼び、申し訳なさそうに目を伏せた古鷹の髪を梳くように撫でる。

「あつ……」

「いや、ありがとな、心配してくれて。甘えさせてもらうよ」

古鷹の髪はさらさらしていて、なんの引っかかりもなく指の間をすり抜ける。

「少し仮眠をとる。一時間経つたら起こしてくれるか?」

「自室で休まれてはいかがですか?」

「そこまでは流石にな。書類もまだまだ残つてるし」

「そういうことなら……。はい、わかりました!」

正面にあるソファに寝転び目を閉じると強烈な睡魔に襲われて、すぐに意識は深く沈んでいった。

× × ×

「あ、提督。お目覚めですか」

「ん……古鷹？」

目を覚ますと正面から声が聞こえてきた。

頭の裏に柔らかい感触、目の前には古鷹の顔。そして仄かに漂う甘い香り。いわゆる膝枕というやつをされているらしい。

「んっ……」

身体を捩ると衣が擦れる音がして、古鷹が口の端から微かに息を漏らす。

「す、すまない。重かっただろう」

慌てて起き上がり謝ると古鷹は両手を胸の前で左右に振った。

「い、いえ。私が勝手にしたことですから！」

俺を気遣つてそう言つてくれる古鷹。彼女の頬にはうつすらと朱が差していた。

「……やっぱり古鷹は優しいな」

「えつ？ そんなこと——」

「あるよ。古鷹のいいところだ」

「……／＼

恥ずかしそうに、けれど嬉しそうに顔を背ける古鷹のその表情を、俺は今まで見たことがなかつた。

着任は早かつたとはいえ彼女と関わった時間はそれほど長くない。

もつと古鷹のいいところを知つていきたい。そんなことを言えば、きっとまた彼女は謙遜するのだろうけど。

撫で。ボイヌ

「提督、今日の出撃の報告だけど——」

「提督さん！ タ立頑張ったっぽい！ ほめてほめて！」

午前の出撃を終えて、第一艦隊の副官時雨が執務室に報告に来た。タ立はまあ……、いつものことだ。

通信で事前に連絡を受けていた通り、今回のMVPはタ立が取つたらしい。

「ほいっく♪」

わしやわしやとタ立の頭を少し強めに撫でていると、衣服の上からでもわかる膨らみが腹部にあたり……つてダメだつて。これはタ立が頑張ってくれたご褒美なんだから。色即是空心頭滅却……。

「むう……。提督……その、僕も——」

そうやつて俺が煩悩と戦つていると、時雨が横か何かを求めるようにじつと見つめてくる。

「時雨、どうかしたか？」

「……ううん、何でもないよ」

気になつて訊いてみると時雨は首を横に振る。その姿はどこか何かにがつかりしているように見えた。

ひとしきり撫で終えたあと、夕立の頭から手を離すと彼女は捨てられた子犬のような目で見上げてきた。

「うう……、もう終わりっぽい？」

もつと褒めてやりたいのはやまやまだが、これも報告にあつた通り夕立は中破、時雨は小破している。そんな状態のままこうしているわけにもいくまい。

「先に入渠してきなさい。ほら、時雨も」

「はい……」

「ほら行くよ夕立

「わわっ、待つてー！」

部屋を出ていった時雨の背中を夕立も慌てて追いかけていき、部屋には俺と今日の秘書艦の村雨だけが残された。

「半裸の夕立に抱きつかれる気分はどうだつた？」

「変な」と聞くなよ……」

やけに含みのある言い方について反応してしまう。しかし割と聞かれたくない質問で、俺は目を逸らしながらごまかすのが精一杯だった。

俺を問い合わせる村雨の口元は愉しそうに歪んでいるが、その目は全く笑っていない。

「なあ、怒つてる?」

「全ツ然怒つてないわよ♪」

嘘だ!!

俺は大きくなめ息を吐きながら村雨の頭に手を伸ばす。これで勘違いだつたらかつ
こ悪すぎるな……。

「はあ……、これでいいか」

「んつ／＼。……なんでこういうときだけ察しがいいのかしらね」

村雨は僅かに目を伏せながら、俺の手の動きにあわせて頭部を揺らしている。
「だけとはなんだ。これでもかなり気を配つてのつもりだぞ」

「はいはい、あとで時雨姉さんにもしてあげてね」

言われなくたつて、もともとそのつもりだつての。

×

×

「それじやあ報告だけど——」

「つとその前に」ナデナデ

「?……!?’

「いつもタ立のフオローありがとな。お疲れ様」

「……まつたく。

君は本当に……」

白露日和

「それにしても改まつて用つてなんだろね？」

今日の執務を終えると、白露型姉妹の部屋に呼ばれていた俺は秘書艦の白露とともにその足で彼女たちの部屋に向かっていた。……まあ、どちらかというと白露が主役なんだけど。

「さあな」

表情に出ないようすに笑いをかみ殺しながら、惚けるように肩を竦める。

今日は四月五日。当の本人が気づかないというのもおかしなものだな。

部屋の前まで行くと数度扉をノックして、許可を待たずにノブを回す。

「連れてきたぞ」

「え？」

座卓に置かれた料理の数々。そして俺の発言を白露が訝しがつたのも束の間、室内に

轟音が鳴り響いた。

「白露姉さん」

「「「「誕生日おめでとう！」」」 っぽい！」

「へっ?!えっと、これはどういう……?」
けたたましいクラッカーの音に気圧されて、白露は呆然としてその場で立ち尽くしている。

春雨はそんな白露の手を引いて部屋の中に招き入れた。

「どうつて、今日は白露姉さんの進水日ですよ?」

「白露の誕生日パーティーっぽい!」

「つ〜〜!!ああもう、可愛い妹達め!大好きだ!!」

妹たちのサプライズに感極まつたのか、白露は近くにいた時雨と村雨を腕いっぱいに抱きしめた。

「ちょっと姉さん、苦しい……」

「でも時雨姉さん嬉しそうな顔してるわよ?」

「それは……まあ、ね」

時雨は少し目線をそらして、誤魔化すように横髪を弄ぶ。そんな彼女をよそにして、位置が離れていた夕立は白露の後ろから飛びかかり背中に抱き着いた。春雨はその様子を楽しそうに見つめている。

「夕立も白露のこと大好きっぽい!」

「はい!頼れるお姉ちゃんです!」

「夕立、春雨……。二人も大好きだあ!!」

「……普段は村雨の方がお姉さんらしいけどね」

「そんなこと言つて、こないだ——」

「わあ!! 村雨だめ!」

「ふふつ♪」

空いていた座布団の上に腰を下ろし、仲睦まじい彼女たちを眺めていた。

こんな風に姉妹仲、あるいは艦娘同士の仲がいいのを見るのはやはり嬉しいものだ。

「本当にありがとう! いつちばんいい日になつたよ!」

一度席に座ると落ち着きを取り戻したのか、白露は改めてそう言つた。

その目尻がうつすらと湿つていることを、きっとみんな気づいていただろうけど、誰も何も言わなかつた。

「そういうのはまだ早いわよ?」

しかしこれではない。たつた一夜だけのパーティーだが、まだまだ始まつたばかりだ。

時雨たちが取り出したのは形様々な小包みで、それを順に白露に渡していく。

「はい姉さん僕たちからこれ」

「プレゼントっぽい!」

「日頃の感謝です！」

「受け取つてくれると嬉しいわ」

「みんな……」

そして何も持つてきていらない俺。……いや、ちゃんと進水日は覚えていたしプレゼントも買おうとしたんだ。でもな……。

「でまあ、俺も用意しようと思つたんだが何故か時雨たちに止められてな」

「え、なんで？」

「なんでも、替わりに次の休日を空けておけとか」

流石に何を求められてるかわからないほど鈍くはない。せいぜい労わせてもらおう。

「あつ……」

振り向いた白露に、時雨たちは楽し気に微笑みかける。俺には彼女たちが『いつてらっしゃい』と、そう言つているように見えた。

「ま、そういうわけだ。こんなことで代わりになるかはわからないが、週末どつか行こうか

「うんっ！」

とはいえる贈らないものもあれなので、そのときにまた何か贈ろうか。
どうか彼女にとつてその日が一番いい日になりますように。

白露日和2

大規模作戦の後処理を終え、思っていたよりも少し早くある程度の休みをとれるようになつた。白露との約束はもう少し先なので、普段からあまり余暇というものが無い俺としては急に休めと言われても何をしていいかわからず、数日間ただ手持ち無沙汰な日々を過ごすことになりそうだった。

ところが、その白露自らが『週末は白露型のみんなでピクニックがしたい！』と提案したのだ。

現在、その準備のために時間を持て余していた俺と、ついてきてくれた白露と一緒に買い出しに来ているのだが……。

「なあ白露、本当にいいのか？」

彼女はどこかに連れて行くという約束はなしでいいと言い出した。その代わりピクニックには必ず来てくれ、とも。

こんなことによかつたのだろうか？ そう思つて白露に尋ねてみると顔いつぱいの笑顔で返された。

「うん！ もつちろん！」

「白露に限った話じゃないが、お前たちはもう少し欲張ってくれてもいいんだぞ？」

吹雪といい白露といい、どうにもうちの娘たちはわがままというものが苦手らしい。夕立や鈴谷はともかくとして、他の娘たちはあまり自分の欲求を口に出すことがない。あつたとしてもだいたい今の白露のように大したことのないものばかりなのだ。

「そう言われても、もう提督からいっぱい貰つちやつてるからなあ……」

「俺が？」

「うん、一番いいもの。提督がみんなにくれたもの」

「……？」

白露は大切な何かを守るように両手を胸の前で重ね、握りしめた

俺自身、彼女たちに貰っているものと同じだけのものを返せているとは思えない。だ
と、いうのに白露は『一番』のものを貰つたのだと言う。当然心当たりなどあるわけもな
い。

「せめて欲しいものとかはないのか？」

「うん、欲しいものかあ……」

なればこそ、俺からちゃんと形のあるものをあげたかった。だというのに……。

「あ、そうだ！ ポ○チ持つていきたいポテ○！ 買つてきていい？」

俺は肩に重荷がのしかかつたような脱力感に苛まれた。

「……好きなだけ持つてこい、いくらでも買ってやるから」

「やつたあー！」

もうちょっと何かないのか……。

意気揚々と駆けてゆく白露の背中を目で追う。彼女の足取りは弾るように軽くて、どこまでも楽しそうだつた。

「……でもまあ白露が、彼女たちが幸せそうだから、きっとこれでいいのだろう。

「取つて來たよ！」

「俺うすしお派なんだが」

「わかってないなあ。のりしおがいつちばん美味しいんだからつ！」

それはそうと、少し遅くなつたがプレゼントくらいは用意しておこうか。

白露日和3

「ん、空気が美味しいっぽい！」

「ふふつ、夕立姉さんはしやぎすぎですよ」

春うらら。注ぐ日差しは辺りを暖かく包み込み、そよぐ風はうつかり眠りについてしまいそうなくらい心地いい。

鎮守府からほど近い場所にある、少し荒い道を抜けた先の草原を、腕を広げて縦横無尽に駆け回る夕立は、春雨がうつかり笑つてしまつたようになんとも微笑ましかつた。

その後方に立つ俺のさらに後ろで彼女たちを見守る時雨と村雨の瞳には、どこか憂いがあつた。

（姉さん、本当に良かつたの？）

（何が？）

内容が気になるが、それなりに離れているうえに彼女たちの声は小さく、ほとんど俺のところまでは聞こえてこない。

（何つて、せつかく提督と二人でデートできるチャンスだつたのに。それをみんなでピクニックだなんて……）

(いいの、これで。そりやあ、ちょっと惜しい気はするけどさ。でも妹のことも同じくら
い好きだから！それに祝つてもらつた上に私一人で独占しちやうのも、ね？)

(姉さん……)

「だから今日はいっぱい楽しむぞお!!」

「うん、そうだね」

話が終わつたのか、白露たちは少し歩調を速めて俺の背中に追いついた。

「提督、着いて早速だけど村雨のちょっと頑張つたお弁当、食べてみる？」

食べりゅうううう！！

……。

夕立と春雨を呼び戻してから村雨が包みを開け、レジャーシートの上に広げられるのは色鮮やかな料理の数々。見ているだけで食欲をそそられてしまう。

準備が整うと、みんなで手を合わせてから一斉に箸を動かし始めた。

流石村雨というべきか、やはり見た目通りにどの料理も美味しく、口に運ぶ手が止まらない。

「やっぱり村雨姉さん手料理は本当に美味しいです！」

彼女自身かなり料理上手な春雨をしてこう言わせられるのは、うちの鎮守府でもそれほどいないだろう。

「村雨はいい嫁さんになりそうだな」

「嫁つ!?えっと、それはあの……」

村雨は視線をあちこちにさまよわせて口ごもった。

まあ、そりやそうか。艦娘たちに守られている俺でさえいつ命を落とすかわからないのだ。なのに常に前線で戦う彼女たちにとつて結婚というものは相当苦しい決断を迫られるもののはずだ。少し思慮が足らなかつたか。

そんな俺の思考を知つてか知らずか、夕立や時雨、春雨はどこか恨めし気、というよりは羨まし気な目を向けてきた。

「うう～～……」

「提督、これ僕が作つたんだ」

「私もいっぱい手伝いました！」

「ん？ああ、二人ともありがとう」

（（……そうじやない）です）

俺が感謝を伝えると二人は落胆を表すように項垂れた。なぜだ……。

「夕立、いくわよ」

「ほいっ！」

昼飯を食べ終えてしばらくして、腹ごなしに軽い運動をすることにしたようで、白露と俺以外のみんなは草原に出て行つた。

……しかしああやつて夕立がフリスビーを追いかけているとますます犬っぽいな。

それにしても、

「白露はいかなくともいいのか？」

普段ならこういうとき夕立とともに真っ先に駆けだしそうな白露だが、今日に限ってはレジャーシートのうえで遠巻きに妹たちの様子を眺めていた。文字通り、遠く離れてしまつたものを見るかのように。

「うん、たまにはこういうのもいいかなあって」

今の、いや、最近の彼女にはいつものような元気がない。先日の買い出しの時も少し無理しているような節があつた。

「悩みでもあるのか？」

「……なんでこういうときだけ鋭いのかなあ」

白露は困ったように苦笑し、膝を抱えて頭を埋めた。それから俺の顔を窺い見るようにならずかに瞳を覗かせる。

「ねえ、提督。私つてみんなの役に立ててるのかな」「あたりまえだろ」

うちの鎮守府に役に立たない艦娘などいない。最前線で戦う金剛や加賀はもちろん、後方で頑張る暁たち、戦えない間宮や伊良子だつて形は違えど欠かせない存在だ。

「当然、白露だつて。

「でも時雨と夕立は海域攻略組だし、村雨と春雨は執務とか料理とかできるし。私だけなんにもないなーって」

本当はもう少し後で言うつもりだつたんだが……。

「白露、この後工廠に来てくれるか?」

「え? うん、いいけど」

× × ×

「お待たせ提督」

表面上はつつがなく終わつたピクニックのあと、辺りが暮れ色に染まる頃。

工廠から出てきた白露の姿は以前と大きく変わり、その長く伸びた髪が際立つて目立つっていた。

「本当は誕生日に合わせるつもりだつたんだが間に合わなくてな……、すまない」

「……ううん、すっごく嬉しい。ありがとう提督!」

改二になつて見違えた彼女だが、その笑顔には微塵も変わらない、見た者も元気にするような明るさが宿つていた。

「さて白露、明日はさつそく神通たちと出撃してもらう。
「任せて！ いちばんいい活躍、してみせるから!!」

夕立や時雨も一緒だ」

ミッドナイト春雨

しばらくの休息を経てまた鎮守府にいつもの忙しさが戻ってきた。

久しぶりの仕事に勘が鈍っていたのか少し多いくらいの作業量でも手こずつてしまい、まだ書類の束を抱えたまま辺りはすっかり暗くなつてしまつていた。

今回は明らかに俺の不手際なので自分で何とかすると言つたのだが、やはりこういうところだけ強情な春雨は隣の机でカリカリとペンを走らせている。その目はどこか焦点があつておらず、率直に言つてかなり眠そうだ。

「春雨、もう戻つてもいいんだぞ？あとは俺がやつとくから」

「いやです！司令官はどうせまた無茶するんですから」

頑なに休もうとしない春雨。しかしそろそろ疲れが表情にも出てきている。

だが正直なところ、彼女の言う通り、俺一人だとこの山を片付けるころには日は昇りきつてしまつているだろう。そうなれば今度こそ吹雪や古鷹が目を放してくれなくなるのは間違いない。提督として情けない限りだが今日は春雨を頼らせてもらうか。
「すまない春雨。助かる」

「そう言うなら司令官はもつと私たちを頼つてください。春雨も、姉さんたちも、吹雪さ

んも。みんな司令官の力になりたいんですよ？」

もう十分頼つてしまつていると思うのだがな……。それに彼女たちの本来の仕事は深海棲艦と戦うこと。間違つても書類を相手に戦うことではないのだ。

「疲れたらいつでも休んでいいからな」

「春雨は大丈夫です！」

それから数時間、目に見えて減つた眼前の山と引き換えに、とうとう春雨の瞳から生気が消えてきた。

「まだやれます……。眠くなんか、ないです……」

そうは言うものの頭はコクリコクリと揺れ、瞼がゆっくりと閉じていく。次第に彼女の動きは鈍つていき、ついには机に突つ伏してしまつた。その小さな口からはかすかに寝息が聞こえてくる。

「すう……すう……」

「ありがとう春雨。ゆっくり休んでくれ」

春雨を起こさないよう静かに腕に抱え、自室のベッドに寝かせた。できれば白露型の部屋にまで運びたかったんだが少し遠いからな……。すまん春雨、俺の布団で。可愛らしい春雨の寝顔を見ていたいのだが、いつまでも長居している暇はない。まだやることは残っている。

「さて、残りやつてしまお——」

立ち上がり部屋から去ろうとした俺を引き留める力が働いて再びベッドに尻を着いた。視線を落とせば俺のものと比べると随分小さな手が袖をしつかりと握りしめている。

「……司令官」

「参ったな……」

後ろ髪をガシガシと搔きながら安らかに眠る春雨を見つめた。この手を振りほどくことは簡単だ。いくら艦娘といえど艦装がなければ年頃の女の子と何ら変わらないのだから。

けれどその手には確かな意志が込められていた。

『これ以上はダメです。司令官も休んでください！』

目の前に横たわる、意識のない少女の声が鮮明に聞こえた気がした。

「んう……」

桃色の髪を梳くように撫でると、春雨は口を閉じたまま気持ちよさそうに声を漏らした。

「わかつたよ」

一度気を抜くとどつと疲れが肩にのしかかり、猛烈な睡魔が襲い来る。目を開けてい

るだけでやつとなくらいで今すぐにでも寝れそうだ。

しかしどうしようか。ベッドからは離れられないし、縁にもたれようにもそれでは春雨の腕が変な方に向いてしまう。つまりは初めから選択肢などなかった。

「すまん春雨……」

俺は春雨の隣に体を入れて横たわった。

もう限界だ。

「……えへへ……しれえかん♪」

その声を聞いたのを最後に、俺の意識は微睡みの中に落ちていった。

× × ×

「あれ、私寝ちゃつて——」

「し、司令官!？」

「なんで私と司令官が一緒の布団で……。春雨を運んで寝ちゃつたのかな」

「やっぱり疲れてたんじゃないですか、もう」

「……私は司令官のためならどこへでも行きます。なんでもします。だからもつと力にならせてください」

二年目の誕生会

「金剛さん、時雨ちゃん」

「「「「誕生日おめでとう」にやし」なのです！」ですう！」つぽい！」

今鎮守府の敷地内の広場には豪勢な食事が並べられ、ここに所属する大半の艦娘が集まっている。

吹雪が音頭を取ると、それに続いて大勢の娘らが盛大に声を上げた。

「Oh、ありがとネー！」

「みんなありがとう。ふふつ、ちょっと照れるね」

そして彼女らの前方には二人の艦娘。うちが誇る第一艦隊の精銳たる金剛と時雨だ。

今日は二人の誕生日ということでこうして皆で祝っている。

基本的には誰かの誕生日の時はその姉妹のみで祝うのだが、群を抜いた活躍を見せる

二人が同じ日に進水したということでこの日、5月18日は豪華なパーティが開かる。ちなみに提案者は明石。あいつ、絶対自分が騒ぎたかつただけだろ……。

ただ、二人はこれだけの規模で祝われるわけだが、二人に限らずうちの鎮守府ではプレゼントを渡していくのは原則その姉妹のみということになっている。実のところ俺

も、というか特に俺は物品で何かを渡すことを禁止されている。うちも百人近い大所帯なので、全員にプレゼントを配つていたら本当にきりがない、ということで艦娘の娘たちが気を使つてくれたらしい。

戻ってきた時雨と金剛は俺の両隣に座つた。その奥には白露型と金剛型の娘らが座つている。

「提督う〜！ミーにあ〜んしてほしいネ！」

「金剛、英國淑女の嗜みはどこにいった……」

「そんなもののラヴの前にはトリビアルなことネ！」

……ただし禁止されているのは物品のみ。それ以外のことなら躊躇いなく甘えてくる。

艦娘たちから慕われているのはもちろん嬉しいのだが、金剛の場合は時々スキンシップが過剰になるからな……。

「んう〜、ベリーーデリシャスネ！」

頬に手を当てて唸る金剛の後ろで、比叡と霧島が微笑ましそうに見つめている。榛名はなんというか、妬まし気にジト目を向けてきていた。

「提督……。その、僕も……」

「はいはい」

金剛と違つて、時雨は普段こんな風に言つてくることは滅多にない。今日くらいは存分に甘えてほしいものだ。

「うん、美味しいや」

「あーあ、顔緩んじやつて。嬉しそうだねえ時雨」

「時雨姉さん、……うう、羨ましいですう」

「夕立も提督さんに甘えたいっぽい……」

「はいはい夕立、今日は時雨姉さんの誕生日だから」

時雨の隣に座る夕立が唸るのを村雨が宥め、春雨がどこか物寂しそうな表情をしている後ろで、白露は頬杖をついてニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべていた。

少しの間そんなことをしていると、瑞鶴が最初時雨たちがいた台の上に立つて声を上げ、みんなの注目を集めた。

「エントリー1番！あの瑞雲に乗つたリンゴを射抜いて見せるわ！」

「おいバカやめろ。私の瑞雲が危ないじゃないか」

瑞鶴が示すのははるか遠方。演習での彼女たちしか知らない俺としては少し無謀な挑戦に思えるが……。

「瑞鶴頑張つて！」

翔鶴の声援を受けて弓を握った瑞鶴に、加賀が声を掛ける。

「瑞鶴」

「……なによ?」

「ひ、左なんてできるわけないでしょ!! 時雨と金剛のためにも失敗できないんだから!」
訝し気に加賀を振り返った瑞鶴に無茶な提案が為された。

「左で射なさい」

瑞鶴がそう言うや否や、加賀はどこからともなく取り出した矢を弓につがえ、あろうことか左手で弦を引いた。

限界まで引き絞られた矢は空間を切り裂かんと弾け、刹那のうちに深々とリンゴを貫いた。もちろん加賀は右利きだ。

果汁が飛び散るのをしり目に加賀は瑞鶴の方へ嘲笑を向けた。

「ふつ w」

「……」

「……」

「……」

「やつてやろうじやない!! 五航戦の誇りを見てなさい!!」

「ず、瑞鶴!? 右で撃つて!!」

「……なにやつてんだあいつら。」

「クスッ。騒がしいね」

彼女たちの様子を見て、時雨は口元を抑えながら笑った。

「去年はもつと静かだったのに」

「ああ、そうだつたな」

あの時はまだ艦娘の数が今の十分の一くらいしかおらず鎮守府も今ほど大きくはなかつたので、会議室を使つて祝つたんだつたか。

時雨はそつと目を閉じ、壊してしまわないよう優しく包み込むように、左のおさげに手を添えた。……そういえばあの頃はまだルールもなかつたな。

「来年はどうなつてるかな？」

「まだわからないさ。だから——」

先のことなんて何一つわかりやしない。明日、それどころか一瞬先に生きてられるかさえわからない。

けれどそんな環境だからこそ、こうした普通の日常が何にも代えがたい時間となる。だから、そんな『今』を——。

「俺たちで作つていくんだ」

「まったく、君はほんとうに……」

時雨は小さくため息を吐いて、呆れたように、けれど優しい笑顔を見せた。

「そうだね。うん、そうだ」

時雨は何かを確かめるようにゆっくりと頷いた。

ふと辺りを見渡すと、どの艦娘もこの瞬間を精一杯楽しんでいるように見えた。
高らかに響く笑い声が磯風に乗せられて、ずっと遠くまで聞こえていた。

× × ×

「そういうえば二人は誕生日が同じだから一緒に祝われるけど、誕生日くらい提督を独占したい！とか思わないの？」

「Of course！考えたことがないと言つたらlifeになるネ」

「But、残念ながら提督はみんなの提督デス」

「それこここの艦娘たちはみんないい娘ネ。だから提督が誰を選んでもセレブレイイトするつもり」

「でも負けるつもりはないヨ」

「提督のハートをつかむのはこの私ネ！」

ブクマ百人記念 百人目の艦隊員

私が深い海の底にいるかのよう暗闇から目を覚ますと、そこは鉄と油の匂いが充満した無機質な部屋でした。

「えつと……」「どこだろう？」

状況を確認するために辺りを散策しようと階段を降り——

「はうわ!?」

——かけたところで足を滑らせてこけてしまった。

「いつたた……」

幸いにもあまり高くはなかつたので傷はないみたいだけど、それでも痛いものは痛いです。

私がこけたままの体勢から戻ろうとすると、ちょうど正面にある扉が開いた。
「そろそろかな……って大丈夫ですか!?」

慌てて駆け寄つてくる桃色の髪の女の子。その姿は知らないけれど、彼女が誰かはわかる。姉妹の名前など忘れるはずもない。私は無意識に震える口をゆっくりと動かした。

「……春雨？」

「あなたは——」

× × ×

「この先で司令官が待ってるよ」

春雨に連れられて鎮守府の中を歩いていると、彼女は他の部屋のと比べると少し大きめのドアの前で立ち止まつた。

「あわわ……えっと、大丈夫かな？ またドジしちやつたりしたら……」

私はすつごく鈍いしどんくさいからいつも失敗ばかりです。それを提督の前でもするかもと思うと、途端に足が重くなってしまう。

「司令官はそんなことで怒るような人じゃないから安心して」

春雨はそういうけど……、うう。

「失礼します！ 司令官、新しい子を連れてきました！」

「えつ？ あつ！」

私が心の準備をし終わる前に春雨はドアを開けてしまつた。平然と中に入つた春雨のあとを慌てて追いかける。

春雨の後ろに隠れながら部屋を見回すと、あまり飾り気のない簡素な室内が目に映つた。

それから視線を正面に戻すと私を奥の椅子に座る男の人が見つめていた。
体格はあまり軍人っぽくなくすらつとしてるけど、その風格はまさに歴戦のそれでし
た。

「さ、五月雨つて言います！よろしくお願ひします！」

気迫に負けて一瞬怯んでしまった私は咄嗟に言葉が出なくなり、少し口ごもつてしま
う。そんなことを気にする様子もなく、提督は立ち上がって私に手を差し出してくれま
した。

「よう、そ我が艦隊へ。私がここを指揮する提督だ。君を歓迎するよ」

「はつ、はい！」

私は恐る恐る両手でその手を掴みました。がつしりとした男らしい手を。

「……くくつ」

「……姉さん、笑つたらダメじゃないか。……ふふ」

私がいつ手を放すべきか待つていると、後ろから聞こえてくる笑い声。振り向くと笑
いをかみ殺している二人の艦娘の姿があつた。

「白露!? 時雨まで!?」

「着任おめでとう！お姉ちゃんをいっぱい頼つていいからね！」
「これからよろしくね五月雨」

「うん、迷惑いっぱいかけると思うけど頑張る！」

ふと、私を歓迎してくれる二人の姉妹を見ていると誰かが呆れた顔で室内を覗いているのが見えた。

「……またやつてるんですか司令官？」

「来るなつて言つたのに……」

提督はどこか気まずそうに眼をそらしながら顔の前で組んでいた手をほどきました。その表情は何かを諦めたかのようなものでした。

「春雨ちゃんの時にもうやらないって言つてたじゃないですか！」

「いや、だが、やはり最初くらいは威厳のある姿でだな」

「それでまた怖がられたらどうするんですか？」

「うつ……」

「それにだいたい——」

「あの、止めなくていいんですか？」

剣呑な雰囲気、というには艦娘の方に提督が一方的に言われていますが、どちらにしてもあまりよくない状況です。

早く止めないと、と逸る私と対照的に、隣に立つ春雨は落ち着いていました。

「まあいつものことですから……」

「いつものことなんだ……」

私が着任した鎮守府は少し変なところみたいですね。

× × ×

「そういえば五月雨でちようどうちの艦娘も百人になるのか」

しばらくして吹雪さんと提督の話し合いが終わると、提督が感慨深そうにつぶやきました。

「それは大変です！」

「うお!? どっから出てきた青葉!?」

すると突如室内に一人の女性が姿を現しました。その人は淡い紫色の髪を後ろでまとめていて活発な印象をうけます。

「そんなことはどうでもいいんです！ 早速歓迎会＆百人目のお祝いをしないと!!」

「お前がはしゃぎたいだけだろ」

「というわけで青葉、鳳翔さんたちのところにいってきます！」

「好きにしてくれ……」

慌ただしく去つていった青葉さん。なんだかすごく個性的な人たちだ。

「ふふつ」

「やつていけそう？」

思わず漏れた笑い声が聞こえていたのか、吹雪さんが微笑みながら私の顔を覗き込んで、そう聞いてきます。

「はい!!」

私は力強くうなずいた。

きつとここでなら楽しい日々を過ごせる。そんな確信に似た予感が私の胸を埋め尽くしていた。

星に願いを

この鎮守府は都会から離れた位置にあり、夜になると光り輝く星々が空にはつきりと見える。その中でも一際目立つ二星を窓から見つめ、誰に言うでもなく呟いた。

「そういえば明日は七夕だつたか」

あまり縁のない行事ごとなんかはついつい忘れてしまうが、明日は七月七日。七夕の日だ。

もう願いごとを短冊に書くような年でもないし、織姫と彦星の話に胸をときめかせるようなロマンチストでもない。

だから今年も何事もなかつたかのように過ぎ去っていくのかと思つていた。

× × ×

翌朝、起きて食堂に行くと何やらざわざわと騒がしい。普段のこの時間は混んでいるわけでもないし川内も寝ているから割と静かな方なのだが、どうやら今日は違うようだつた。

騒ぎの中心の方を見ると主に駆逐艦の子らが隅の方に置かれた笹のもとに集まっている。

「おはよう春雨、これどうしたんだ？」

「あ、おはようございます司令官！それが、今朝来てみたら置いてあつたんです」
少し後ろの方でニコニコとその様子を眺めていた春雨に声を掛けると、彼女は自分の背丈よりも高い笹を見上げた。

「長門さんたちが用意してくれたらしいんですけど、それにしてもすごいですね、これ」

ああ、長門か。なるほどな……。

俺の目の前にある立派な笹には既に数多くの短冊が吊るされている。遠目からそれらを見てみると何とも微笑ましい文言が書かれていた。

はやくおつきくなりたいのです！ 電

りっぱなれでいになるんだから！ あかつき

皆にもっと頼られたいわ 雷

平和なままでいられますように 韶

?
……響が一番しつかりしてないか？頼りにしてるぞ雷。がんばれ電。うん、暁も、な

休んでください司令官 吹雪
→吹雪ちゃんもね 白雪

墮落 初雪

吹雪のやつ……。いいからお前も休んでくれ。ほら、白雪に言われてるぞ。あと初雪は……まあいいか。

いつちゃん強くなるんだから！ 白露

素直になりたいな 時雨

もつと料理上手になりたいわね 村雨

提督さん遊んでほしいっぽい！ 夕立

白露、最近頑張ってるな。これからも頼りにしてるぞ。

時雨は口に出すのが下手だからなあ。もつと甘えてくれていいんだぞ。

村雨、十分美味しいが……。是非味見に付き合わせてくれ

すまない夕立。できるだけ時間取るようにはするから……。

そこまで見てふと、あと一枚短冊が足りないことに気が付いた。

「あれ？ 春雨は書いていないのか？」

「……実はまだちよつと悩んでいて」

春雨はまだ何も書かれていない短冊を両手で持つて口元を隠して困った風な感じ

だつたが、何かを思いついた様子で俺の方を見た。

「そうだ！ 司令官もよかつたら書きませんか？」

「ん、それもそうだな」

まさかこんな年になつて書くようなことになるとは思わなかつたが、たまにはこういうのも悪くないか。

それにしても何を書こうか……。

だめだな、こういうのは悩んだら負けだ。叶えたいことをそのまま書けばいい。インクが擦れる音を立てながら俺は胸にある願いを書いていく。

『この鎮守府から誰一人欠けることがありませんように』

……いや、これは願うものじやない。俺が自力で叶えるべき願いだ。

俺は申し訳なく思いつつも書き終えた短冊を丸めてポケットに入れた

「やつぱりやめておくよ」

「そうですか……」

悲し気な表情を浮かべながら、春雨は手に持つた短冊を俺に見えないように吊るした。

「なんて書いたんだ？」

「教えません♪」

そう言つて春雨は俺をここから除けるように背中を押してくる。しかし振り返る間に一瞬だけその内容が見えた。

司令官のお願いが叶いますように

春雨

夏のひととき

「あつつ……」

「もうすっかり夏ですね……」

さんさんと窓の外で輝く太陽を睨みながら恨み言を吐くと、隣に座る吹雪は額を制服の袖で拭いながら顔を上げた。

「こうも熱いと仕事も捲らんな……」

「それじゃあ少し休憩にしますか？」

「だな」

そういうと吹雪は音もなく立ち上がりと冷蔵庫の方に行き、二つのコップに氷と麦茶を限界まで入れて持ってきた。

「どうぞ司令官」

「サンキユ」

差し出されたコップを受け取り一息に呷ると冷たい感触が喉の奥を通り過ぎていく。火照った体を冷ますようで心地がいい。

扇風機によつて生み出される風を浴びながら、俺はパタパタと胸元を扇ぐ。

「やはり冷房をつくれないのが辛いところだな」

今は夏真っ盛りより少し前の時期。こんな時に限ってうちのエアコンは壊れてしまった。さらに悪いことには、同じような境遇の人が多いのか修理を頼んだもののもうしばらく予定が空いていないらしい。

「修理の予約がいっぱいなんじや仕方ないですよ」

氷を口の中でコロコロと転がしている彼女の首元にもしつかりと汗が玉になつて浮かんでいる。そんな吹雪を見ていると何の理由もなく、至極どうでもいいことが頭に浮かんだ。

「吹雪つてなんか冷たそうだよな」

俺がそう言うと吹雪はひどくショックを受けた様子で首をがっくりと落とした。

「え……、私司令官にそんな風に思われてたんですか!?」

ん? 何か誤解してる? とそこまで考えて思い当たる節があつた。

「ああ、違う違う。物理的にな。ほら手が冷たいとかそういうの」

「そつちですか。……よかつたあ」

吹雪は小さく咳ばらいをしてから改めて俺に向き直った。

「それについてどうしたんですか急に?」

「いや、なんとなく名前的にさ」

吹雪なんて名前だし体温低かつたりするんだろうか?と思つて先の発言をしたのだが、正直全く意味などない。頭が暑さでやられているのがもしかれないな……。

「それが私結構体温高いみたいなんです」

そう言いつつ吹雪は俺の方に手を差し出してくる。軽くその手を握ると確かに少し暖かい。

「本当だ」

「白雪ちゃんたちとやつたときも私が一番暖かくって」

「へえ、そうなのか」

そうやつて吹雪と特に意味のない会話をしていると、気づけば結構な時間が経つてしまっていた。俺は再度椅子に座り直し、転がしつぱなしにしていた羽ペンを握った。

「そろそろ再開するか」

「はいっ! 私も頑張ります!」

まだ休んでいたい気持ちもあるが、いつまでもこうしてばかりじゃいられない。

あちこちに生えた木々から蝉時雨が鎮守府の中に響き渡る。空いた窓からは一陣の風が吹き入り、窓枠に着けた風鈴がチリンと涼しげな音を鳴らす。

「夏だなあ」

「夏ですねえ」

暑さに辟易しながら、俺と吹雪は小さくため息を吐いた。

雨と宿りて

ずっと室内にいても肩が凝つてしまふので、たまには散歩でもしようと外に出ると、ちょうど非番だった春雨もついてきた。

「司令官、今日のお夕飯何がいいですか?」

「うーん、麻婆……豆腐か春雨か」

「頑張つて作りますね」

「楽しみにしてるよ……つて雨?」

せつかくだからとついでに買い出しに来ており街中をぶらぶらしていたのだが、首筋に冷たい物が当たる感触がした。次第に雨足は強くなり、ついには大きな音とともにコンクリートの地面を黒く染め上げる。

「春雨こっち」

「はい!」

慌てて近くの軒下に春雨と駆け込んで一息つくと、雨足はさらに強くなつてきていて当分やみそうにない。

隣を見ると急いで雨から逃れたものの間に合わなかつたようで、ぐつしより濡れた服

にうつすらと桃色の下着が透けていた。

俺は彼女から顔を背けながら、暑くて脱いだ上着を取り出しその小さい肩にかけた。

「春雨、これ着とけ。いくら夏でも濡れたままじゃ寒いだろ」

「でも司令官だつて……」

「いや、その……春雨の服が、な？」

「くっつ！」

春雨は顔を熟れたリンゴのように赤く染め、横目で俺の様子を窺う。

「み、見ました……？」

「まあ見えていないと言えば嘘になるが……」

「そこは嘘でも見てないって言つてくださいよお……」

それからしばらくそこで春雨と雨宿りをしていたが、雨は一向にやむ気配を見せない。「雨、やみませんね……」

「傘持つて来てないのが痛いなあ」

「そうですね……」

春雨が空を仰ぎながら呟く。

「……？」

ふと何かを思い出したようで、彼女は両手で持っていたハンドバッグの中に手を入れ

た。

「……あう」

「どうかしたか？」

「いえ、なんでもないです！はい！」

それで何もないはちょっと無茶があるぞ？

そのままじつと春雨の目を見つめていると、彼女は所在なさげに視線を逸らした。それでも見つめ続けているといったまれなくなつたのか、ついに事情を白状した。「すみません司令官、実は一本だけ折り畳み傘があるんです」

「ん？ よかつたじやないか。なんで隠したんだ？」

「その……、もうちょっと司令官とお話ししていたくて……」

顔を俯けながら聞こえるか聞こえないかくらいの声でぼそぼそと話す春雨。嬉しさと微笑ましさを感じていると春雨が両手に乗せて傘を差しだしてくる。

「使つてください司令官！」

「いやいや、置いていけるわけないだろ」

とはいへ一人で入るには折り畳み傘は少々狭い。春雨だけ先に帰れと言つても絶対帰らないし。それなら現状維持でいいか。急いで帰る理由もあまりないし。

「どうせこの雨だと折り畳みじやびしよ濡れになるだろうし、もうしばらく雨宿りして

ようか」

「は、はい！」

俺がそう提案すると春雨は少し食い気味に首を縦に振った。
「♪♪♪」

上機嫌に鼻歌をすさむ彼女の姿につい、口元が緩んだ。

× × ×

「すっかり遅くなつちゃいましたね」

「今から夕食の準備してもらうのも申し訳ないな」

「いえ！春雨は大丈夫です！」

「あー、その食材明日までもつか？」

「？。大丈夫です、はい」

「じゃあたまには外食でもしようか」

「え？司令官とお夕飯外で一緒にいいんですか？嬉しいです／＼＼」

第六驅逐隊なのです！

「ふう、終わつたか」

「お疲れ様なのです司令官さん！」

疲れで大きくなめ息を吐くと、隣に座つていた今日の秘書艦、電が労いの言葉をかけてくれた。

「電もお疲れ様。ありがとうな」「はわっ!?」

ちようどいい位置にあつた電の頭に手を乗せると、彼女の身体がビクンと大きく跳ねた。

六駆の子たちつてなんというか、すごく撫でやすい場所に頭があるのでついついこうしてしまう。嫌がられてはいないみたいだし。

現に電もしばらくは頭上で前後する掌に身をゆだねていたのだが、次第に顔が赤くなつていき、しまいには勢いよく立ち上がりつてそそくさと逃げるようにな席を離れた。

「お、お茶を淹れてくるのですう！」

「おい電、あんまり走ると——」

ビタンツ！と軽快な音を立てて思いつきりおでこから地面に激突する電。割といつものことなので驚きはないが、いつ見てもやはり痛そうだ。

「ほら、言わんこつたない。大丈夫か？」

「うう……痛いのです……」

赤くなつた電の額をさすろうかと思つたけど、また同じようになりそうなのでやめておいた。

× × ×

「司令官さん、この後間宮さんのお店に行きませんか？」

それからしばらくのんびりしていると、不意に電がそんな提案をしてきた。

「ん？構わんが、電がそんなことを言つてくるのは珍しいな」

「えつと……」

聞き返すと電はどこか恥ずかしそうに口をもぐもぐと動かしながら言い淀んだ。

「お姉ちゃんたち、……その、電も。最近司令官さんとお話してきてないつて寂しがつてるので……。だから今日少し時間を貰えるかお願ひしてみようつて雷ちゃんと話していたのです」

慕われている……、というより懐かれているのはなんとなくわかつていたが、こうやって改めて言葉にしてくれるのは何とも嬉しいものだ。

俺はもう一度、今度は少し強めに電の頭をぐりぐりと撫でた。

「そういうことなら喜んで行こう」

すぐに出る準備を済ませると、電を連れて執務室を後にする。俺は歩きながら、どことなく機嫌がいい電に言つた。

「それから、これからは寂しいならもつと言つてくれ。俺もできるだけ時間作れるようにするから」

「……!? はいなのです!!」

電を連れて間宮の暖簾をくぐると、間宮がニコニコと微笑みながら奥の方の席に案内してくれた。そこでは六駆の子たちが思い思いに談笑に耽つている。

入口の対面に座つていた暁が一番最初にこちらに気づき、俺の姿を見ると驚いた様子で声を荒げた。

「電おそいわよ……つて司令官!？」

「хорошо。これは驚いた。司令官、Добрый вечер (こんばんは)」

「司令官こんばんは！さあ座つて座つて！」

「こんばんは、お邪魔させてもらうぞ。こら、雷押すなつて」

それからは間宮が作った甘味に舌鼓を打ちながら、六駆の子たちといろいろな話をし

た。

最近あつたこと、楽しかったこと、悲しかつたこと。それと直接的には言われなかつたが、彼女たちの『寂しかつた』という気持ちが言葉の節々に感じられた。

やつぱりもつといつぱい艦娘の子たちと接する時間を取らないといけないよなあ……。メンタルケアも提督の仕事なわけだし、せめて戦つてない時くらい彼女たちには窮屈な思いをさせてやりたくない。

「そういえば電と雷は知つてたの？ 司令官が来る」と

そんなことを考えていると、暁が雷と電に今回のことを見ねた。

「そりやあ、提案したのは私たちだし」

「なのです」

「もお。知つてたなら言つてよ……。それならもつとちゃんと……」

暁はがつくりと肩を落とし、尻すぼみに何事かを呟いた。そんな彼女を慰めるように、隣に座っている響が軽く暁の肩をたたいた。

「まあまあ。一人のおかげでこうして司令官といられるわけだし、感謝こそすれ、責めてはいけないさ」

「…………そうね。ごめん電、雷。ありがとう」

「はわわっ、こちらこそごめんなさいなのです！ ちゃんと言つておけばよかつたのです

……

「雷たちも浮かれすぎてたわ……。ごめんなさい」

やつぱりこういった素直さが暁型のいいところだよなあ。何を謝っているのかはよくわからないが……。

× × ×

それからしばらく時間が過ぎると楽しかった時間も終わり、今度は五人で間宮の店の暖簾をくぐつた。

「司令官」

四人と別れる間際、俺を呼んだ響の声音には、いつもの落ち着いたもの以外に儂さのようなものが感じられた。手を離すとどこかに消えてしまいそうな危うさに似た儂さが。

「またこうやって、私たちと一緒に過ごしてくれるかい？」

響の後ろでは電が、雷が、暁が、みんな何かを期待するかのように不安げに揺れる瞳で俺のことをじっと見つめていた。

「もちろんだ」

俺がそう答えると、暁と雷は安堵したように息を吐き、電は嬉しそうにはにかんだ。そして響は雪解けのように柔らかな微笑を浮かべた。

130 第六駆逐隊なのです！

Г
с
п
а
с
и
б
о

とりつくおあたりーと！

猛威を振るつた暑さは鳴りを潜め、季節は徐々に秋へ向かつてゐる。鎮守府の中の木々もわずかばかりだが葉の色を変え、秋の訪れを感じさせてくれる。

「もうすっかり秋だね。秋刀魚の季節だよ」

「秋刀魚か、いいな。鳳翔にでも頼んでみるか」

などと手を動かしながら時雨と和やかに話していると、執務室の扉を誰かが軽く叩いた。

「提督さん提督さん！おしごとおわつたっぽい？」

扉の奥からいつもにましてテンションの高い夕立の声が聞こえてくる。夕立は非番の日にはよくここに遊びにくる。今日もきっとそういうことなんだろう。だが……、目の前に積まれたこの書類の束を片付けるまでは相手をしてあげられそうにない。

「ごめんね夕立。もうちよつとかかりそう」

「わかつたっぽい……。ここで待つてるっぽい！」

時雨がやんわりと待つように言うと、夕立はそのまま扉を開けることなくその場にと

どまつた。

先日までの暑さはどこに行つたと言わんばかりにここ最近は冷えているので、部屋の外にいると寒いはずだ。

「夕立、入らないのか？ そこについても寒いだろ？」

「ううん、待つてるっぽい！」

だから中に入るようになつたのだが、夕立は動こうとしなかつた。普段なら一も二もなくと入つてくるのに……。

夕立にしては珍しい行動に疑念が湧く。何か企んでいるのか？

「ふふつ。提督、夕立が風邪ひいちやう前に早く終わらせよう」

時雨は何か知つてゐるのか楽し気に笑つて再び机に向かつた。

まあ時雨が笑つてゐるんだし、悪いことにはならんだろう。あまり待たせても悪いし急いで片付けてしまおう。

…

「よし夕立。終わつたぞ」

「本当！？ ジヤあじやあ——」

扉の奥に声を掛けると夕立の食い気味な返事が返つてきた。それから間もなく、バンッと勢いよく扉が開かれた

「とりつくおあとりーと！つぽい！」

頭に犬の着ぐるみの帽子？を乗せた夕立が部屋に勢いよく突撃してきた。その手や足には爪の付いたもこもこ、さらには背中側のスカートの裾から尻尾まで見えている。

「がるる、ぼい！」

「おわっ！」

そしてそのまま胸元に飛び込んできた夕立の恰好を見て、今日が何の日か思い出した。

……そういやハロウインか。

「すまん、完全に忘れてた。お菓子は持つてない……」

サラサラの髪をゆっくりと梳くように撫でながら謝ると、夕立は顔を上げて満面の笑みをこちらに向けた

「じゃあ——、いたずらするつぽい♪」

そう言いながら夕立は俺をソファに座るように促し、そのまま膝の上に乗つかつた。それからこちらに徐々に体重をかけてくる。

「一緒にお昼寝するつぱい！」

これいたずらでも何でもないけど……。まあいいか。夕立が楽しそうだし。

ふと視線を横に向けると、呆れた顔の時雨が大きめの毛布を持って立つていた。

「……はあ。一人とも、こんなところで寝たら風邪ひくよ?」

ほら、とこちらに毛布を渡す時雨。いそいそと俺と自分の身体を毛布で包んだ夕立は、少し寄つて一人分のスペースを空けた。

「時雨もはいるっぽい!」

「僕も? わかつたよ」

やれやれ、と言いたげな表情を見せた時雨だが、その頬は隠せないほどに緩んでいる。たまには素直になればいいのに……。

それから、俺たちは春雨が夕食で呼びに来るまで三人そろつてずっと眠っていた。呼びに来た時にどこか春雨が不機嫌だつたのは触れないでおこう。

「春雨、今日のメニューは?」

「秋刀魚らしいですよ司令官! 凰翔さんが作る旬の秋刀魚料理、楽しみです! はい!」

好感度メーター前編

「なんだこれ？」

昼食を取つて執務室に戻つてくると、俺の机の上に小さな袋が置いてあつた。

これは何なのか訊こうと先に戻つていた吹雪の顔を見てみると、彼女は呆れたような様子で肩を竦める。

「さつき明石さんが嬉々として持つてきましたよ」

「ああ……」

吹雪のその一言で色々と察してしまつた。

明石。彼女は基本的に工廠から出てこないが、稀に発明品をこうして持つてくる。そして、その時の表情が楽しそうであればあるほどろくなものではない。

「……開けるか」

「開けちゃうんですね……」

「流石にこのまま放置するのもな。あとで煩そだしだ」

そう言いながら袋から中身を出すと、リモコンのような何かと取扱説明書が出てきた。

「なんだこれ？」

イラストなどもついていてやけに凝っている説明書を開いてみると、その上部にでかでかとこう書いてあつた。

『好感度メーター』？

「もう嫌な予感しかしないんですけど……」

そうは言うものの、吹雪も俺の手元を覗き込んでページを捲るのを促してきていた。

『艦娘に好かれているのか知りたくないですか？そんな時はこれ！好感度メーター！』

「なんかすでに胡散臭いな……」

『使い方は簡単！好感度を測りたい艦娘に向けて測定ボタンを押すだけ。0～100までの数字で表示されます』

そこまで読んだ後、下に注意書きが描かれていることに気づいた。

『注意　好感度と一口に言つても愛情、友情、親愛などその種類は様々です。数字が高いからと言つても愛されているとは限らないので気をつけてください』

説明書を最後まで読み終えて隣に座る吹雪の方を見てみると、何とも言えない表情をしていた。

「それでこれ、どうするんですか？」

「せつかくだし使ってみるか……」

「え、使うんですか？」

吹雪はこんな胡散臭いものを？とでも言いたげな目でジトッと見てくるが、俺だつて艦娘の子らにどう思われているかは気になる。

「はあ……。わかりましたけど、内気な子にするのはやめてくださいよ。電ちゃんとか春雨ちゃんとか」

「わかつてるよ。というかちゃんと本人に許可を取つてからするつもりだ」

「というわけで、だ。

「吹雪、見ていいか？」

「私ですか！」

「まあ、うん」

何年も一緒にやつてきた仲だし嫌われているとは思つてはいないし思いたくないが、やはりどう思われているかは気になる。

「いいですけど、あんまりおもしろくないですよ」

「別に面白さを求めてるわけじやないから」

「……むう。ならばい、どうぞ」

吹雪は少し不満げにしながらも、体を差し出すようにして目を瞑つた。その姿はわずかに震えていてどこか緊張しているように見える。

さて。吹雪の方をリモコンに向けてボタンを押した。

92

……高いな。

「どうでした？」

吹雪は再度体を寄せて俺の手元を覗き見た。

「92、まあこれくらいですか」

「思つてたよりも高かつたな……」

「そりやあ、この鎮守府が始まつたときから一緒にやつてきたわけですし……。信頼してますよ」

「そうか……、ありがとう」

改めて面と向かつて言われるところ、何と言うか嬉しいが恥ずかしい。

「それで、次は誰にするんですか？」

「んー」

バタバタバタ。

悩んでいると廊下を慌ただしく走る音が聞こえてきた。この足音の主は、もう姿を見るまでもなくわかる。夕立だ。

「ていとくさーん！遊びにきたっぽいーー！」

「夕立、廊下は走らないの。提督、お邪魔じやないかな？」

勢いよく室内に入ってきた夕立と、その後ろから控えめに姿を現した時雨。ちょうどいいし、次はこの二人にしようか。

「ちょうどよかつた。二人とも、ちょっと付き合つてくれないか？」

「つぽい？」

「どうしたんだい？」

「～～状況説明中～～

「そういうことならうん、いいよ」

「よくわからぬんだけどやつてみるつぽい！」

二人から了承を貰つたので早速測つてみる。

夕立は普段これだけ遊びに来ているし、時雨もなんやかんやで夕立と一緒にここに来ていているので、嫌われているということはないだろう。とはいって、やはり多少は緊張する。

時雨 8 3

夕立 8 5

「どれどれ、これつて高いの？」

「多分な」

「吹雪はもう測つたんだよね。いくらだつたの？」

「へえ……」

「夕立より吹雪の方がいいとくのこと好きっぽい？」

吹雪の数値を聞いた瞬間、時雨の目が座った。夕立の方は純粹な瞳で小首を傾げている。

「つて、流石に吹雪には勝てないよね。年季が違うよ」

しかし、数瞬おいて時雨は物騒な空気を収めて首を竦めた。どうやら吹雪は彼女たちに相当信頼されているらしい。

それから、時雨はコホンと咳払いをしてから、改めて俺の方に向き直った。

「この際だから正直に言うと、僕は、きっとみんなも提督のことが好きだよ。いつも一生懸命で、僕たちの為に働いてくれて、本当に感謝してる。そんな提督だから僕たちの背中を預けられるんだ」

「夕立もていとくのことだいすきっぽい!!」

「おまえら……」

年甲斐もなく大声を出して泣きそうになつた。艦娘たちからそんな風に思つてもらえるなんて、まさに提督冥利に尽きる。

俺は時雨と夕立の体を引き寄せて、両腕に抱きかかえた。

「俺もお前たちが大好きだ。お前たちの為ならいくらでも無茶できる」

時雨は照れ臭そうに顔を背け、夕立は逆に目一杯抱き着いてきた。

「……そう言つてもらえるのは嬉しいけど、ちゃんと休んでほしいな」「ていとくさん、いつもいそがしそうで遊んでくれないっぽい」

「うつ……、善処する……」

いつも吹雪に言われていることだ。そう言われては言い返せない。俺は気まずくなつて目を背け、お茶を濁すような曖昧な返事をした。二人はそんな内心を見透かしているのか、疑わし気にこちらを見ていた。

それから、二人を離して次のターゲットを考えることになつた。

「うん、白露とか村雨とか？」

「いいんじやない？少なくとも提督を嫌つてるつてことはないし」

「春雨もよさそうっぽい！」

「そうだな。ひとまず白露に頼んでみるか」

「呼んでくるっぽい！」

「あ、夕立！ごめん提督、行つてくるよ」

途端に駆け出す夕立に続いて、時雨も部屋から飛び出していつた。

……正直、俺のことを嫌つている艦娘に試してみたい気持ちがある。……大井とか。

普段はどう思つてているのかなんて聞けないし、はぐらかされて終わりだ。この機会に

何故嫌われているのか、聞き出したかった。それで、できることなら和解したい。
「提督一、時雨たちから提督が呼んでるって聞いたんだけど」
そんなことを考えていると、執務室のドアが叩かれた。